

一般社団法人日本地質学会

The Geological Society of Japan

理事

任期: 2022年6月11日から2024年総会

任期: 2020年5月23日から2024年総会

会長(代表理事) 岡田 誠(茨城大学) 笠間友博(箱根町立箱根ジオミュージアム)

神谷奈々(同志社大学) 副会長 杉田律子(科学警察研) 亀田 純(北海道大学)

星 博幸 (愛知教育大学) 川村紀子 (海上保安庁海上保安大学校)

常務理事 中澤 努 (産業技術総合研究所) 北村有迅 (鹿児島大学)

間常務理事 緒方信一(中央開発(株)) 清川昌一(九州大学)

執行理事 内尾優子(国立科学博) 黒柳あずみ(東北大学学術資源研究公開センター)

内野隆之(産業技術総合研究所) 桑野太輔(千葉大学)

亀高正男 ((株) ダイヤコンサルタント) 沢田 健 (北海道大学) 下岡和也 (愛媛大学)

高嶋礼詩(東北大学) 古森 樹(東北大学) 古森 樹(東北大学) 西 弘嗣(福井県立大学恐竜研究所)

理 事 青矢睦月 (徳島大学) 松田博貴 (熊本大学)

芦 寿一郎(東京大学) 三田村宗樹(大阪公立大学)

 天野一男(東京大学空間情報科学研究センター)
 道林克禎(名古屋大学)

 磯崎行雄(東京大学)
 矢島道子(東京都立大学)

 大友幸子(山形大学)
 山路 敦(京都大学)

大橋聖和(山口大学) 山本啓司(鹿児島大学)

監事

岩部良子(応用地質(株)) 山本正司(山本司法書士事務所)



一般社団法人日本地質学会

〒101-0032 東京都千代田区岩本町 2-8-15 井桁ビル 電話 03-5823-1150 FAX 03-5823-1156 (振替口座 00140-8-28067) e-mail: main@geosociety.jp ホームページ http://geosociety.jp

日本地質学会 News

Vol.26 No.3 March 2023

The Geological Society of Japan News

一般社団法人日本地質学会

〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-15 井桁ビル 6F 編集委員長 松田達生

TEL 03-5823-1150 FAX 03-5823-1156 main@geosociety.jp (庶務一般) journal@geosociety.jp (編集) http://www.geosociety.jp

Contents

学会主催する対面行事・イベントにおけるマスクの着用について……1

案内……2

岩石-水相互作用(WRI-17)/応用同位体地球化学(AIG-14)合同国際会議

各賞・研究助成……2

2023年度室戸ユネスコ世界ジオパーク学術研究助成/2023年度 (第2回) 大型計算機共同利用公募研究の公募

公墓……2

令和5年度ふじのくに地球環境史ミュージアム職員 (研究職/環境・ 環境史) 募集

博物館・ジオパークで地球を学ぼう!(15)……3 大阪大学総合学術博物館:キャンパス内から産した化石,鉱物,埋 蔵文化財も展示!(伊藤 謙・石橋 隆)

2023年地質の日行事……5

惑星地球フォトコンテスト:第14回ほか入選作品展示会/街中ジオ散歩in Yokohama「身近な地形・地質から探る横浜の歴史」/オンライン普及講演会「日本列島の地質探訪―古生代から新生代まで」/近畿支部:第40回地球科学講演会「日本海拡大時の日本列島の変動―地質と古地磁気の研究からどこまでわかっているかー」/その他:観察会「観音崎の地層と関東大震災の傷跡をたどる」

TOPIC7

日本地質学会の国際的プロファイルの向上:2007年から現在そして 未来へ(ウォリス サイモン・井龍康文・石渡 明)

第14回惑星地球フォトコンテスト審査結果……8

地質学雑誌特集号(冊子)販売のお知らせ:球状コンクリーションの科学―理解と応用―……9

地質学雑誌:新しい論文が公開されています……10

院生コーナー……12

学生・若手研究者のための交流会を終えて(下岡和也ほか)

表紙紹介……13

第13回惑星地球フォトコンテスト:入選「4億年の記憶」(中川達郎)

印刷・製本:日本印刷株式会社 東京都豊島区東池袋4-41-24

学会記事……14 2022年度第6回執行理事会議事録

CALENDAR ······16

追悼……17

名誉会員 端山好和先生を偲ぶ (猪俣道也)

入会申込書……18

卷末 会費口座振替依頼書

会員各位

2023年3月13日

学会が主催する対面行事・イベントにおける マスク着用について

> 一般社団法人日本地質学会 会長 岡田 誠

新型コロナウイルス感染症に対する政府のマスク着用の考え方が変更され、3月13日からはマスクの着用が「個人の判断」に委ねられることになりました.

「マスク着用の考え方の見直し等について」(新型コロナウイルス感染症対策本部決定,令和5年2月10日) https://corona.go.jp/news/pdf/kihon_r2_050210.pdf

日本地質学会では、これまで対面行事・イベントでは 適切な感染防止対策の一環としてマスク着用を推奨して いましたが、政府の方針変更を受けて、下記の様な対応 方針に変更いたします.

- 1. マスク着用は原則として個人の判断に委ねることとす。
- 2. 室内で密になる場面では着用を推奨する
- 3. 各イベント等の主催者が、必要に応じてマスク着用 を求めることがある旨をイベント参加者に事前に伝 きる
- ※政府の考え方(上記pdfの1(6))「(前略)事業者が 感染対策上又は事業上の理由等により,利用者又は 従業員にマスクの着用を求めることは許容される.」

なお、本方針は、支部、専門部会、委員会等を含む地質学会すべての含む対面行事に適用されます。また、今後についても、社会状況を注視しつつ適切に判断し、適宜、ホームページ、geo-Flash等でご連絡いたします。



ご案内

本会以外の学会および研究会・委員会からのご案内を掲載します

岩石-水相互作用(WRI-17)/ 応用同位体地球化学(AIG-14) 合同国際会議

日程: 2023年8月18日(金)~22日(火) 会場: 仙台国際センター(仙台市青葉区青葉 山)

共催:日本地質学会ほか

口頭発表の登録締切:3月31日(金)(ポスタ

ーは5月31日 (水)).

早期割引料金の締切:4月30日(日)

この会議はIAGC (International Association of Geo Chemistry)の合同会議となります.

岩石一水相互作用並びに同位体地球化学の代表的国際会議でありますが、コロナ禍で、2年延期しました。ようやく、対面開催に踏み切ることができるようになったと考えております。日本開催は、1983年の三朝以来となります

JpGUやGoldschmidt会議に比べると小ぶりの会議になりますが、そのため、人と人との密度の濃いコミュニケーションをはかることができます。

わたくし自身もこの会議を通じて,世界の 研究者との気軽な付き合いができるようにな りました.

また、学生たちにとっても、論文でしか知らない研究者に直接会って話ができる貴重な機会になると思います。ぜひ、多くの学生さんの参加をお願いいたします。

学生割引とサービスは特に手厚くしています.

今回の会議では、多彩なフィールドトリップを準備しています.

詳しくは、下記webサイトをご覧ください. https://www.wril7.com/

> WRI-17 · AIG-14組織委員会 Secretary General 土屋範芳

各賞・ 研究助成



日本地質学会に寄せられた候補者の募集・推薦依頼等をご案内致します.

2023年度室戸ユネスコ世界ジオパーク学術研究助成

助成対象研究:室戸ユネスコ世界ジオパークで実施する研究課題とする。自然科学、人文科学、社会科学、教育学に関する研究や、自然・文化遺産の保護に関わる研究など、あらゆる研究分野を助成対象とする.

助成対象者:

- (1) 助成対象の年齢、職業、所属は問わない。個人、団体のいずれでも応募可能。ただし以下の(2)、(3) をいずれも遂行できる者に限る。
- (2) 2024年3月に開かれる市民向けの成果発表会(サイエンスカフェ)で講演を行い、同年3月中に実績報告書及び決算書を提出すること.
- (3) 2025年3月末までに研究成果を学会発表・ 論文のいずれかの形で公表すること.

助成金額:研究課題1件あたり上限25万円(3件を助成予定)とする。

募集期間:2023年3月9日 (木) ~5月9日 (火) 問い合わせ先:

室戸ジオパーク推進協議会事務局

Tel: 0887-22-5161

E-mail: info@muroto-geo.jp

詳しくは、https://www.muroto-geo.jp/edu_information/2023muroto-researchgrant/

2023年度(第2回)大型計算機 共同利用公募研究の公募

応募資格:申請,及び研究組織へ参加できるのは,国内外の大学,国・公立研究機関の教員・研究者又はこれに準じる者(名誉教授・大学院学生・財団等民間団体や企業の研究者)とします。なお、大学院学生は、大型計算機共同利用公募研究のc挑戦的研究を除き、研究代表者となることはできません。また、学生の扱いについては「12注意事項(5)」を参照してください。※若手研究者の積極的な応募を歓迎いたします。

申請方法: 共同利用 HP (https://www.eri. u-tokyo.ac.jp/kyodoriyou/application_form/) にある所定の様式に必要事項を記入のうえ, Web 申請システムを使用し、申請してください.

Web申請システム:https://erikyodo2.confit. atlas.jp/login

研究期間:採択日から2024年3月末まで

審査の方針:本研究所の共同利用委員会では、提出された申請書を審査し、採否を決定します。研究計画の内容が各種共同利用の趣旨に沿っていることが重要です。また、各種の専門分野の研究者からなる委員全員で審査しますので、その点を意識した申請書の作成をお願いします。

申請期限: 2023年5月31日(水)【厳守】(A 超大型研究, B大型研究, C挑戦的研究) ※C挑戦的研究については, 計算リソースに 余裕があれば8月, 11月末を申請期限として も受け付けます.

【各種提出先, 問い合わせ先】

〒113-0032 東京都文京区弥生 1-1-1 東京大学地震研究所 研究支援チーム(共同 利用担当)

電話: 03-5841-1769, 5710

FAX: 03-5689-4467

E-mail: k-kyodoriyo@eri.u-tokyo.ac.jp

詳しくは、下記を参照してください https://www.eri.u-tokyo.ac.jp/wp-content/

 $uploads/2023/03/2023\hbox{-}2_supercomputer.pdf$

公募

教員・職員公募等の求人ニュ ース原稿につきましては、採 用結果をお知らせいただけま すようお願い致します.



令和5年度ふじのくに地球環境史 ミュージアム職員 (研究職/環境・環境史)募集

職種等:研究職1名(任期なし)

専門分野:環境・環境史

採用年月日:令和5年11月1日(予定)

勤務場所:ふじのくに地球環境史ミュージア

ム (静岡市駿河区大谷)

応募資格:

- ・昭和38年11月2日以降に生まれた人
- ・博士学位(外国において授与されたこれに 相当する学位を含む.)を有する人

受付期間:令和5年3月14日 (火) ~5月9日 (火) 問い合わせ先:

ふじのくに地球環境史ミュージアム 〒422-8017 静岡市駿河区大谷5762

電話:054-260-7111

メール: museum-kikaku@pref.shizuoka.lg.jp 詳細は、募集案内をご覧下さい.

https://www.fujimu100.jp/9653/



キャンパス内から産した化石,鉱物,埋蔵文化財も展示!

大阪大学総合学術博物館 講師 伊藤 謙

大阪大学総合学術博物館 招へい研究員 石橋 隆

◆大阪大学総合学術博物館の概要

大阪大学には、ふたつの源流があります. 江戸時代中期に大坂町人の手で創設され、自由で批判精神に富む学問の花を咲かせた「懐徳堂」と、江戸時代末期、緒方洪庵が創設し、近代日本創設の原動力となった福沢諭吉をはじめ、若き俊英たちを輩出した「適塾」です。大阪大学はこうした知的伝統の上に、わが国有数の総合大学に発展し、さまざまな分野で日本と世界をリードしています.

懐徳堂と適塾から多くの文化財を継承するとともに、1931年の創立以来の教育研究の成果として多数の学術標本を収集保存しており、これらを収蔵して活用するために2002年4月に大阪大学総合学術博物館が全国で8番目の国立大学総合博物館(省令施設)として設立されました。

収蔵される資料は、先史時代の出土品から 先端研究の機器や標本にいたるあらゆる学術 分野に関連するもので、総数は166万点に達

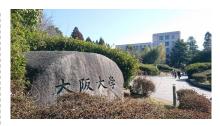
します.これらを展示するとともに教育や研究活動を進めています.また、大阪大学の歴史や数々の先達の業績を現代に伝えるとともに、最新の研究成果を社会に発信し「地域に生き、世界に伸びる」というモットーのもと、社会と大学とを結びつける役割を本館は担っています.

◆展示施設

大阪平野北部の千里丘陵、大阪大学豊中キャンパス内の待兼山に総合学術博物館はあります。博物館は「待兼山修学館」(写真1)と「大阪大学会館」(写真2)からなり、共に建物が登録文化財です。常設展示室は待兼山修学館にあり、この館は待兼山の麓にある4階建ての建物で豊中キャンパスでは大阪大学会館に次いで2番目に古く、1931年に大阪大学医学部の前身である大阪医科大学の附属病院石橋分院として建てられ、2008年に国の登録文化財となりました。エントランスホールで

写真1(左).大阪大学総合学術博物館 待兼山修 学館

写真2(下). 大阪大学会館



は、全長7mに達するマチカネワニ化石(後述)の復元骨格が来館者を出迎えます(写真3). 1階はコンピュータ黎明期における大阪大学の研究貢献の展示、2階は懐徳堂や適塾から現在の大阪大学にいたる大学の歴史、活躍した阪大ゆかりの研究者と業績、3階には、待兼山の自然や歴史、キャンパス内で発掘されたマチカネワニの化石実物などが展示されています(写真4、写真5).

地質や惑星科学関連の資料は、主に3階に 集中しており、大阪周辺の地質の成り立ち、 近隣の旧鉱山や鉱産資源のコーナーなどがあ ります。

大阪大学会館は豊中キャンパスで最も古い建物で、1928年に旧制浪速高等学校の校舎として建てられ、学制改革により大阪大学に移管されて以降、旧教養部の建物として使われました。2004年に国の登録文化財となりました。この館は主に博物館や適塾記念センターの事務室、研究室、講堂等が占めますが、3階に不定期公開の展示室や資料収蔵室があり、鉱物などの地学標本、薬学標本などが展示されています。

◆待兼山

博物館に隣接する標高約77mの里山で、待 兼山修学館と大阪大学会館の間は遊歩道で結 ばれています。大阪層群の海成層や淡水層か らなり、海棲の貝類化石を産するほか、淡水 層からは褐鉄鉱の一種である高師小僧「待兼







写真3(左).マチカネワニ全 身骨格模型

写真4(右上)。マチカネワニ 化石模式標本

写真5 (右下). マチカネワニ 復元図. 画:川崎悟司









写真6 (左上). 待兼山産待兼小僧 (褐鉄鉱), 長さ約4cm 写真7 (右上). 六甲山の花崗岩 や多田鉱山の銀鉱石など 写真8 (左下). 鉱物標本 水晶 写真9 (右下). 大阪大学会館 鉱物標本展示

山石」を産出し(写真7)、これは現在もみられます。1964年にはマチカネワニの化石も発見されています。また、待兼山一帯は待兼山遺跡群として多くの遺跡がみられ、弥生時代の集落跡があるほか、5世紀後半と推定される直径15mの円墳である待兼山5号墳では人物埴輪、馬形埴輪などの一部が出土しています。これらの待兼山産の標本や文化財が、待兼山修学館で展示されています。

◆マチカネワニ化石

大阪大学の至宝とも称され、豊中キャンパスのシンボルやキャラクターにもなっている巨大なワニ化石のホロタイプ実物標本で、3階に展示されています。国指定の天然記念物でもあります。また日本地質学会の「県の石」で大阪府の石(化石)にも選定されています

1965年に、小畠信夫らによる論文の中で、 亀井節夫と松本英二は、このワニをクロコダ イル科のマレーガビアル属の新種と考え、産 地の名前をとってトミストマ・マチカネンセ (Tomistoma machikanense) と命名しました。それ以降「マチカネワニ」と呼ばれるよ うになりました。

その後、青木良輔によってマチカネワニが 再研究され、1983年の論文ではマレーガビア ル属ではなく新しい属のワニであることが示 され、トヨタマヒメイア・マチカネンシス (Toyotamaphimeia machikanensis) と再命 名されました。この属名は、古事記に出てく るワニの化身とされる豊玉姫から名付けられ たものです。青木によれば、下顎の後方にあ る骨(関節骨後突起)が分類学的に重要であ り、マチカネワニのこの骨は、マレーガビア ル属よりもワニ属に近いことを指摘しまし た、マレーガビアル属もワニ属もクロコダイ ル科に属しますが、マチカネワニがどちらに 属すかは謎のまま残されていました。

そこで、2000年から大阪大学、北海道大学、 国立科学博物館の共同研究チーム(小林快次 ら)が、マチカネワニの骨をひとつずつ詳細 に記載した後、そのデータを基にして系統解 析を行いました. そして2006年になってよう やくマチカネワニ化石骨格の完全記載論文が. 小林快次らにより出版されました。 解析の結 果として 次の4つが挙げられます 1)マチ カネワニは、どのワニとも異なることが確認 され,属(Toyotamaphimeia)が有効であるこ と. 2) マチカネワニが、クロコダイル科・ト ミストマ亜科に属すこと. 3) マチカネワニが, 進化型のトミストマ亜科であること. 4) マチ カネワニが、現在生きている唯一のトミスト マ亜科であるマレーガビアルTomistoma schlegeliiに最も近縁であること.

統計解析によって、マチカネワニが他のワニとどのくらい違うのかを網羅的に見ることが可能になり、その結果、青木によって結論づけられた「マチカネワニはどの属とも異なる:結果(1)」ということと、小島らが提唱した「マチカネワニはマレーガビアルに近縁(非常に良く似ている):結果(4)」の両方の整合性をもつものとなりました。

現在生息しているワニ類は、上で述べたクロコダイル科以外に、アリゲーター科とガビアル科があり、大きく3つのグループに分けられ、そのほとんどが熱帯や亜熱帯の地域にすんでいます。しかし、マチカネワニの化石が含まれていた地層から発見された花粉化石の分析によると、当時の気候はもっと涼しい温帯型の気候であったと考えられています。そうだとすれば、マチカネワニは温帯型のめずらしいワニになるわけです。マチカネワニは世界的に見ても大変貴重な化石標本です。

◆鉱物標本

総合学術博物館に保管されている鉱物標本は、研究や教育のために活用されてきたもの

です。日本国内産のみならず、海外各地の標本も含まれる貴重なものです。平成までの約100年間の長い期間にわたり継続的に蒐集されたもので約500種、総数は約2000点を数えます。大阪大学の前身のひとつである旧制大阪高等学校と旧制浪速高等学校の標本、教員の研究者が収集したコレクションなどからなります。一部が待兼山修学館の常設展示にあるほか、大半は大阪大学会館3階(公開不定期)に展示されています(写真8、写真9)。

◆おわりに

以上のように大阪大学総合学術博物館では、 大阪大学が創立以来収集・保管してきた学術 標本を展示公開するとともに、大阪大学の最 新の教育・研究成果を展覧会の形式で紹介し ています. 2007年にオープンした待兼山修学 館展示場では、大阪大学の源流である懐徳堂・ 適塾から現在の大阪大学にいたる大学の歴史, 大学の歴史の中で様々に活躍した研究者とそ の業績、大阪大学豊中キャンパスの立地する 待兼山の自然や歴史、待兼山で発掘されたマ チカネワニの化石などを常設展において公開 しています. 待兼山修学館3階の多目的ルーム では毎年2回、春と秋に企画展・特別展を行い、 学内の研究者の協力で、最新の教育・研究成 果の紹介を行っています。企画展・特別展の テーマに合わせたミュージアムレクチャーや ワークショップも開催しています. 当館は「総 合学術博物館」を標榜しており多分野に広く 門戸が開かれております. 今後も当館の活動 にご協力を賜りましたら幸いです.

info

大阪大学総合学術博物館

〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-20 開館時間:10:30~16:30 (最終入館16:00) 休館日:日・祝・年末年始 https://www.museum.osaka-u.ac.jp/



2023年の「地質の日」学会関連のイベントをご案内します. イベントの情報は、学会HP<http://www.geosociety.jp>で 随時更新していますので、あわせてご覧下さい.

★惑星地球フォトコンテスト

第14回ほか入選作品展示会

日程: 2023年5月16日 (火) 午後~5月28日 (日) 14時まで

場所:東京パークスギャラリー(上野グリンサロン内)(台東区上野公園 JR上野駅 公園改札出てすぐ)

入場無料, どなたでもお 気軽にお立ち寄り下さい.



入選作品の画像や講評は近日学会HPに掲載予定です. 問い合わせ先:日本地質学会事務局 main@geosociety.jp

★街中ジオ散歩

街中ジオ散歩in Yokohama 「身近な地形・地質から探る横浜の歴史」

主催: (一社) 日本地質学会, (一社) 日本応用地質学会, 神奈川県立生命の星・地球博物館

日時:2023年5月14日(日)

見学場所:横浜市(京急東神奈川~JR桜木町)

主な見学地点と見どころ:「東神奈川周辺の台地と明治初期の 領事館跡」~「横浜防災センター」~「横浜市街地の埋め立て と干拓」~「掃部山周辺の石垣と湧水」

案内者:笠間友博氏(箱根ジオパーク推進協議会事務局)

集合及び解散場所・時間:

集合:幸ヶ谷公園(京急神奈川駅から徒歩4分:スタッフが案内します)9時

解散: JR桜木町駅 16時頃 (予定)

会費:大人1,500円, 小中学生500円 (保険代含む, 小中学生は 保護者同伴)

募集人員:20名 (定員を超えた場合は、締切後抽選)

募集期間:4月3日(月)~16日(日)

対象:参加資格は特にありませんが、急坂、階段を含む高低差 がある箇所があります.

申込に際しての注意事項:

- 1) 雨天中止,小雨決行とします. ただし,小雨の場合は昼で打ち切りとさせて頂きます.
- 2) お弁当は各自持参でお願いします. 昼食を予定している地 点(横浜防災センター) は近くに購入するお店はありませ ん
- 3) 連絡はメールにて行います. メールでの連絡ができない場合は、申込をご遠慮下さい.
- 4) 新型コロナの蔓延状況により中止の可能性があります (5月 8日 (月) に最終決定をさせて頂きます).
- 5) 一般(非会員)の方を対象とした行事なため、一般申込者 (非会員)を優先とさせて頂きます。
- 6) 見学会当日のマスクの着用は室内の見学地点を除き任意となります。但し、当日体調が悪い方、発熱が認められた方は参加をご遠慮下さい。
- 7) 申込時には保険加入や名簿作成のために必要な情報をお知らせ頂きます。申込項目には漏れなく記入をお願いします。

記入頂けない場合は、お申込は受付できません.

- 8) 中学生以下の方は保護者同伴でお申込下さい(保護者の分もあわせて申込手続きを行って下さい).
- 9) お申込いただいた方は上記事項に同意していただけたものとみなします.

申込方法:上記注意事項をよくご確認のうえ、学会HPもしくは右記QRコードの専用申込フォームからお申し込み下さい(お電話でのお申込はお受けできません).



(注) 抽選の場合、当選の発表は、4月中に メールにて連絡させて頂きます。

問い合わせ先(メールにてお願いします):

日本地質学会関東支部(担当 細矢)mail: hosoya@ckcnet.co.jp

★オンライン普及講演会

日本列島の地質探訪 一古生代から新生代まで

日本地質学会では、広く一般に地質学の魅力と重要性を知っていただくため、毎年、5月10日の「地質の日」を記念した様々な行事を実施しています。本年は、各地のジオパーク拠点博物館に協力いただき、オンラインで各施設の展示や地域の露頭等を紹介することで、聴講者が自宅にいながらにして各地の地質の魅力に"触れ"、日本列島の地質の多様性に"触れる"機会とします。

日程:2023年5月13日(土)9:30~12:05

主催:日本地質学会

実施方法

- ・Zoomを用いたオンライン形式で3施設の登壇者がリレーで講演 (1題40分程度).
- ・参加者はYouTubeライブでの参加. 後日オンデマンドでの配信も行う.
- ・スライドでの講演だけでなく、可能であれば展示室や露頭からの中継なども推奨する.

スケジュール

9:30 ~ 9:35 ご挨拶 岡田 誠(日本地質学会会長)

9:35 ~ 9:40 概要説明

9:40 ~ 10:20 講演 1 「四国西予ジオパークと黒瀬川帯」 四国西予ジオミュージアム (高橋司館長・榊山匠学芸員)

日本最古級の岩石や地層を特徴とする「黒瀬川構造帯」。そ





れらはジュラ紀の付加体である「秩父帯」の中に断続的に 細長く分布していますが、その成り立ちについては謎が多 く、研究者による見解も分かれています。今回は黒瀬川帯 研究発祥の地である西予市から、"黒瀬川帯"をキーワード として四国西予ジオパークやジオミュージアムを紹介しま す。

(休憩)

銚子ジオパークミュージアム (岩本直哉主任学芸員・上田 修郎主任学芸員)

犬吠埼灯台で有名な銚子の東海岸. ここには局所的に中生代の付加体,前孤海盆堆積物が露出します. これらの基盤岩の存在により,銚子は半島となり,銚子ならではの風土が形成されました. このように銚子の礎となった中生代の地層や産出する化石を中心に銚子の地質の魅力を銚子ジオパークミュージアムよりご紹介いたします.

(休憩 11:10~11:20)

11:20 ~ 12:00 講演 3 「糸魚川からフォッサマグナと日本列島 誕生の謎に迫る」

糸魚川フォッサマグナミュージアム (小河原孝彦学芸員・ 香取拓馬学芸員・茨木洋介学芸員・郡山鈴夏学芸員)

糸魚川ユネスコ世界ジオパークの拠点施設・フォッサマグナミュージアムと、代表的なジオサイトであるフォッサマグナパークから、日本列島の生い立ち、大地の生い立ちと、日本酒など私たちの暮らしの深い関わりを紹介します。断層と日本酒にいったいどんな関係があるのか気になったそこのあなた、ぜひお聞き逃しなく。

12:00~12:05 終わりの挨拶

★近畿支部:講演会

第40回地球科学講演会「日本海拡大時の日本列島の変動―地質と古地磁気の研究からどこまでわかっているかー」

近畿支部では、地学団体研究会大阪支部・大阪市立自然史博物館と共催で、「地質の日」協賛行事として5月14日(日)に星博幸氏(愛知教育大学)を講師に迎え、「日本海拡大時の日本列島の変動―地質と古地磁気の研究からどこまでわかっているかー」を開催します。対面での聴講に加え、YouTubeでの配信も予定しています。多くの方のご参加をお待ちしております。「日本海拡大時の日本列島の変動―地質と古地磁気の研究からどこまでわかっているかー」

日本海拡大時に、日本列島はどのように大陸から移動してきたのでしょうか。その時、日本列島はどのような変動を受けたのでしょうか。これまで日本海は1500万年前頃に拡大したと考えられていましたが、最近の研究によって拡大はもう少し前に起こり、1500万年前には拡大がほとんど終わっていたことがわかってきました。また、日本海拡大時に日本列島の地殻が広い範囲で変形したことや、拡大直後に西日本太平洋側で一斉にマグマ活動が起こったことなどもわかってきました。本講演会で

はこれらの問題について、地質と古地磁気の初歩の解説も交え ながら、最新の研究成果を解説します。

日時:2023年5月14日(日)14:00~16:00

講師:星 博幸氏(愛知教育大学教授)

場所:自然史博物館本館 講堂(YouTubeを使った同時配信も

行います)

定員:講堂での聴講:150名(定員を超えた場合は抽選)

対象:講堂での聴講:どなたでも参加できます(小学生以下は 保護者同伴).ただし申込が必要.

ネット配信:インターネットに接続することができる方

申込締切:5月1日(月)申込方法については、大阪市立自然史博物館ホームページ(http://www.mus-nh.city.osaka.jp/)のイベントページをご覧下さい、※YouTubeを使った配信での聴講をご希望の方は、申込不要です。

配信・接続方法:YouTubeを使った配信を予定しています. YouTubeの「大阪市立自然史博物館」チャンネル(https://www.youtube.com/c/大阪市立自然史博物館/)にアクセスして表題の番組をクリックしてください。開始時間になれば始まります.

参加費:無料(博物館での聴講の場合は博物館入館料が必要) 主催:地学団体研究会大阪支部・日本地質学会近畿支部・大阪 市立自然史博物館

その他:6月18日(日)まで見逃し配信を行います。同時配信を見られない人はご覧下さい。

★その他

観察会「観音崎の地層と関東大震災の傷跡をたどる」

観音崎は海底に堆積した地層が隆起してできました。その過程でできた傾斜した地層や断層、そして海底地すべりの痕跡など様々な地層があります。これらの観察を通して、大地の成り立ちを学んでいきます。また、関東大震災の傷跡も辿っていきます。

主催:三浦半島活断層調査会 後援:日本地質学会 ほか

日時:令和5年6月4日(日)10:00~15:00頃(小雨決行)

集合場所:観音崎バス停(10時集合)

観察コース:観音崎バス停~灯台下海岸~灯台入口~たたら浜

園地 展望園地〜観音崎バス停

募集人員: 先着 30 名 参加費: 500 円(資料代・保険代)

持ち物: 弁当・飲み物・雨具 歩きやすい靴で ご参加ください. 申込: 郵便番号・住所・氏名 (フリガナ)・年齢・電話番号を 記載し, 往復葉書またはメールで5月20日までに下記あてにお

申込みください.

申込先:三浦半島活断層調査会事務局(青木厚美方)

〒 247-0056 鎌倉市大船4-21-5-603

電話 080-1193-5179, Eメール atsumi-aoki@mcko.jp

TOPIC

日本地質学会の国際的プロファイルの向上: 2007年から現在そして未来へ

東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻 ウォリス サイモン 東北大学大学院理学研究科地学専攻 井龍康文 原子力規制委員会 石渡 明

国際的な情報交換やネットワーク作りが科学全般を発展させ るために重要であり、その重要性は年々増加しつつある. 日本 地質学会の活動においても、国際的協力は欠かせない要素であ る. 日本の地質学分野と海外の関係は19世紀まで遡るが注(文 献1). 平成以後では、1992年に第29回万国地質学会を京都で 開催したことや、翌年の日本地質学会100周年記念式典へ海外 から来賓が招かれたことは多くの会員が記憶するところであ り、現在の地質学会の国際交流体制につながる起点となったと いえよう. 近年, 正式な合意に基づく交流が重要視されるよう になり、その礎とされているのが組織・団体間の学術交流協定 (Memorandum of Understanding; MOU) である. 日本地質学 会は過去15年に渡り、海外の複数の学術団体とMOUを締結し、 積極的に国際協力を行なってきた. このような国際協力の嚆矢 は、2007年に韓国地質学会と締結したMOUであり、これは当 時の木村 学会長の主導による (これ以後の日本地質学会の国 際交流協定・報告等についてはhttp://geosociety.jp/science/ content0049.htmlを参照). その後の6年間で国際協力は大きく 発展し、モンゴル、タイ、ロンドン、台湾の地質学会との MOUの締結に至った. われわれ3人は、会長、副会長、国際 関係担当執行理事として,これらの協定締結のために尽力した. そこで、本稿では、我々が地質学会の国際協力推進に直接的に 関わってきたこの15年間を中心に、何が達成されたのかを総括 するとともに、MOU締結先と議論してきた内容について述べ る. 本稿が、今後のポストコロナ世界で活躍が期待される国際 交流担当者に参考になれば幸甚である.

国際交流の主な目的の1つは、共同して科学的成果を出版・ 公表することにある. このような出版物は、異なる地域の異な るネットワークを結びつけ、情報の効率的な拡散を後押しする. 国際交流協定から生まれた主たる科学的成果として、ロンドン 地質学会との共同研究を挙げることができる. その第一弾は, 2011年に発生した東北地方太平洋沖地震と津波に関するもので あった. この頃, 英国では過去の津波堆積物の地質学的証拠が 見出され、プレート境界から遠く離れた国でも、この問題に関 心を持つ必要が認識され始めるようになった. このような背景 から、両学会は2つのシンポジウムを開催することにした。ま ず、2014年9月の日本地質学会第121年学術大会(鹿児島大会) では、藤野滋弘、後藤和久、David R. Tappin、藤原 治が世 話人となって「津波ハザードとリスク: 地質記録の活用」が開 かれ、翌年(2015年)の9月にはロンドンで、Ellie M. Scourse, Neil A. Chapman, David R. Tappin, Simon R. Wallisの主催に より「Tsunamis: Geology, Hazards and Risks」が開催された. ロンドンでのシンポジウムは、権威あるロンドン地質学会の Arthur Homes Meetingsの1つとして実施された。 鹿児島大会 では、静岡県および千葉県の東海地震と関東地震の痕跡を伝え る地形・津波堆積物・建造物を見学する国際シンポジウム関連 巡検が実施された. また, ロンドンでのシンポジウムは, 英国 北部のシェトランド諸島に分布する津波堆積物を見学する巡検 も含む内容であった(文献2). 両シンポジウムとも、津波堆 積物の地質に関する理解を深め、それをリスク評価の改善と向 上に役立てる方法を探ることを目的としていた. これらのイベ ントの資金は、英国笹川財団の David Cope 教授の尽力により 調達され、科学的成果は Island Arcの特別号(文献3) とし て、またロンドン地質学会のSpecial Publication(文献 4)と して出版された.

また、日本地質学会とロンドン地質学会の密接な協力関係は、「The Geology of Japan」(文献5)という重要な書籍の刊行と

いう成果に繋がった. 同書の執筆には、日本地質学会の多くの会員が参加し、井龍と石渡が序文を寄せた. また、ロンドン地質学会との関係から、日本地質学会会員は同書を割引価格で購入可能という特典があった. 同書は国際的に高く評価され、さらにロンドン地質学会が有する幅広い販売網により、日本地質学会とその会員の活動を世界中の人々に紹介し、日本の地質に関する最新の情報を提供することに役立った.

朝鮮半島,特に同半島の先カンブリア紀の基盤は、日本の顕生代の地層の地質学的ルーツであり、日本地質学会と大韓地質学会は、古代から深い交流のある隣国のパートナーとして重要な存在である。学術交流協定の調印以来、両学会は交互に学術大会(総会)に代表団を派遣し、学会の執行部レベルの情報交換を行ってきた。日本地質学会構造地質部会が主催する合同巡検も何度か開催されていた。このような日本地質学会と大韓地質学会の交流は数回に渡ってニュース誌に掲載されてきた。2024年の第37回万国地質学会議の韓国開催という提案への支持表明は、こうした活動の自然な延長線上にあるものであったが、両学会の意見が一致せず、2024年に韓国で開催予定の万国地質学会議は日本地質学会の公式支援なしで開催されることになった(https://geosociety.jp/science/content0150.html). こうした困難はあるものの、貴重なパートナーであることに変わりはなく、今までの交流実績をさらに発展させることが重要である.

タイやモンゴルの地質学会との関係は、これまで学術大会に相互に代表団を派遣するという活動を主とするものに留まっている。しかし、両国地質学会との学術交流協定は、国際シンポジウムや国際共同研究を実施するための重要な基礎となっており、将来のさらなる発展が期待される。台湾と日本は地質学の歴史において多くの側面を共有している。台湾地質学会との国際交流協定により、若手研究者を主たる対象とする合同巡検が、磯崎行雄会長の主導のもとで実現に向けて検討されたが、新型コロナウィルス感染症の感染拡大のため実施には至らず、バーチャルなセレモニーで学術交流協定を更新することに留まった

以上のように、日本地質学会の国際交流は最近の十数年間で大きく発展し、The Geology of Japanの出版のような目に見える成果を挙げてきた。

国際シンポジウムの開催は、日本地質学会の国際的な知名度 を向上させるよい方法であり、シンポジウムでの発表内容が国 際誌の特集号として出版された例がある. 例えば、日本地質学 会第122年 (2015年長野大会) および第124年 (2017年愛媛大会) 学術大会では、国際シンポジウム「東アジアの初期テクトニク スと古地理」および「東アジアの古生代古地理」が開催された. 両シンポジウムには日本、韓国、英国、タイ、台湾に拠点を置 く研究者の講演が集まった。 両シンポジウムは、 Mark Williams. ウォリス サイモン、大路樹生らの共同研究推進者が得た Leverhulme Trustからの研究助成金が用いられ、その成果は Island Arcの特集号として結実した (Virtual Issue: The Paleozoic evolution of the Korean Peninsula and Japan; 文献 6). この特集号の論文の多くは被引用数が多く, 近年のIsland Arcのインパクトファクターの向上に大きく貢献した. また, 第122年学術大会では、法地質学に関する国際シンポジウムが 開催された. 同シンポジウムは、杉田律子がInternational Union of Geological Sciences, Initiative on Forensic Geology (IUGS-IFG) の協力を得て開催したもので、海外からの参加者 に対しては財政的なサポートがなされた. シンポジウムの成果 は地質学雑誌の特集号「法地質学の進歩」として出版され(文

献7), 急速に発展する地質学の一分野が, 多くの地質学関係者に紹介された.

日本地質学会の将来を展望し、国際的なネットワークのさらなる発展のために、同学会の創立125周年記念として開催された第125回学術大会(2019年札幌大会)では、ウォリス サイモン、矢島道子、竹下 徹が主宰する国際シンポジウム「社会と地質」に国際交流協定締結学会の会員が招待された、残念ながら、胆振東部地震の影響でシンポジウムにおける発表は中止となったが、国際交流協定締結学会の代表者と2時間ほどの会議を行うことができた。同会議では、以下が合意された。

- ・学会レベルでの協力関係の発展のためには、学会相互の情報 交換と円滑なコミュニケーションが重要かつ必須である.
- ・巡検への参加は、その地域の地質を新たに学べるだけでなく、 率直な意見交換が可能であり、良好な関係を構築するための 優れた方法である。
- ・これまでの成功に終わった国際シンポジウムが示すように、 財団や企業の財政的なサポートは国際交流プログラムを維持・発展させるための鍵である.
- ・各学会が実施する年会で、英語を公用語とする国際シンポジウムを定期的に開催すれば、交流はさらに深まると期待される
- ・ソーシャルメディアは、特に若い世代にとって、コミュニケーションや情報交換を効果的かつ円滑に行うためのツールとなっており、今後、その重要性はさらに高まる.

ウクライナでの戦争は、人類を結びつける共通の価値観の重要性とその存在のもろさを思い起こさせた。国際的な理解と調和に少しでも貢献することは価値があることである。過去15年間、われわれはこの原則に沿って日本地質学会と世界の地球科学関連学会との交流の発展に貢献しようと尽力してきた。コロナ以後の新しい世界では国際協力への新しい挑戦が始まり、これには地理的な境界を越えるオンライン・コミュニケーションの新しいツールが役立っている。われわれは、日本地質学会が国際的な学術活動をさらに活発化させ、地球科学の世界的なハブとしての役割を発展させ続ける次の15年に大きく期待している。

引用文献

- Wu, S. X., 2015, Empires of Coal: Fueling China's Entry into the Modern World Order, 1860-1920. Stanford Univ. Press. 280p.
- S. Fujino, K. Goto, D. Tappin & O. Fujiwara, eds., 2016, Geological records of storms, tsunamis and other extreme events. Island Arc 25, issue 5.

- 3) E. M. Scourse, N. A. Chapman, D. R. Tappin & S. R. Wallis, eds., 2018, Tsunamis: Geology, Hazards and Risks. Spec. Publ. Geol. Soc. London, 252p.
- 4) 石澤尭史・渡部真史・後藤和久・池原 研・S. R. Wallis・ 井龍康文, 2016, 地質学雑誌122, I-II.
- 5) T. Moreno, S. R. Wallis, T. Kojima & W. Gibbons, eds, 2016, The Geology of Japan. Geological Society of London 522p.
- 6) S. R. Wallis, T. Oji, M. Williams & M. Cho, 2019, Virtual Issue: The Paleozoic evolution of the Korean Peninsula and Japan. Island Arc.
- 7) 杉田律子・川村紀子編, 2020, 特集号: 法地質学の進歩. 日本地質学雑誌第126巻, 第8号.

注1

英語の「Geology」を初めて「地質学」と訳したのは、イギリス人のW. Muirhead師(1822-1900)が1853年に著した「地理全誌」(中国語)であり(文献1)、その新しい学問が国内に広まったことにドイツ人のH. E. Naumann博士(1854-1927)が大きく寄与したことがよく知られている。すなわち、日本の地質学分野のルーツは国際的な協力に深く関わっていると言える。

注2

- ·日韓地質学会学術交流協定調印. 井龍康文, 日本地質学会 News, 15(11), 27-28 (2012)
- ・韓国2013秋季地質科学連合学術大会(大韓地質学会第68次定期総会)公式訪問の報告.石渡 明,日本地質学会News,16(11),47-48(2013) https://www.geosociety.jp/faq/content0481 html
- ・鹿児島学術大会での国際交流. ウォリス サイモン, 日本地 質学会News, 17(11), 49-50 (2014)
- ・日本地質学会第122年学術大会(長野大会)における国際交流活動報告.ウォリス サイモン,日本地質学会News,19(3),12(2016)
- · 2015 Fall Joint Conference of Geological Science of Korea 参加報告. 井龍康文, 日本地質学会News, 19(3), 13 (2016)
- ・日本地質学会第123年学術大会(桜上水大会)における国際 交流活動, 井龍康文, 日本地質学会News, 19(11), 38 (2016)
- ・大韓地質学会創立 70 周年記念国際シンポジウム参加報告. 井龍康文・辻森 樹、日本地質学会News, 21(1), 9 (2018) http://geosociety.jp/uploads/fckeditor/science/ 20171025korea.pdf

第14回惑星地球フォトコンテスト審査結果

最優秀賞:

朝永武志 (長崎県) 古代の双六

優秀賞 (2点):

近藤 洋 (兵庫県) 大西洋と砂漠 佐藤竜治 (静岡県) リンシェ村

ジオパーク賞:

高場智博(長崎県)個性豊かな、まぁ~るい畑

日本地質学会会長賞:

大坪 誠 (茨城県) 屋根瓦のような重なり

ジオ鉄賞:

礒部忠義 (福岡県) 日南海岸の洗濯岩

スマホ賞:

高場智博(長崎県)スナヘビの大群

大学生・大学院生賞 (新設): 福永拓真 (神奈川県) 離島の断崖

入選 (4点):

佐藤 孝 (新潟県) 太古の覗き穴 新垣隆吾 (沖縄県) 刻々と

藤倉聖也 (群馬県) 一期一会の姿

新宅草太 (熊本県) 真夏の断崖 (中高生部門)

※作品画像,講評,地質解説などは,次回ニュース及び学会 HP に掲載予定です.また作品の展示会も予定しています(本誌5ページ参照)

地質学雑誌特集号 (冊子) 販売のお知らせ

球状コンクリーションの科学─理解と応用─

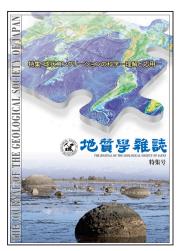
Spherical concretions -understandings and applications-

世話人 吉田英一・西本昌司・長谷川 精・勝田長貴

本特集号は、2021年学術大会(名古屋大学:オンライン)で開催された特別シンポジウム「球状コンクリーションの科学-理解と応用-」で発表された研究およびその趣旨に関連した研究を集約・紹介し、この分野の今後の発展に資するために企画されたものです。

球状コンクリーションは、その形状と保存良好な化石を内包することなどから江戸時代の記録にも残るほど古くから興味と関心は持たれていたものの、形状が何故丸く、硬く、炭酸カルシウムや酸化鉄が濃集し、内部の化石が三次元的に保存良好のままなのかについては、ほとんど理解が進んでいませんでした、本特集号は、それらを読み解くに至ったメカニズムの一端を示したものです。またそれと同時に、コンクリーション化プロセスの工学的応用の可能性も示しています。本特集号が、コンクリーションに興味を持つ研究者の皆さんの一助となることを期待しています。

それぞれの論文は、地質学雑誌掲載論文としてJ-STAGE上で閲覧可能ですが (https://www.jstage.jst.go.jp/browse/geosoc/-char/ja)、1冊のまとまった冊子をぜひお手元の蔵書に加えて下さい.



目 次

(前文)

(フォト) 国内の上部白亜系におけるアンモノイドを含むコンクリーションの産状. 御前明洋, 村宮悠介

(総説) 球状コンクリーションの理解と応用. 吉田 英一

(論説) 双葉層群足沢層 (上部白亜系コニアシアン階下部) 浅海成細粒砂岩の大型アンモナイト密集層と巨大炭酸塩コンクリーション濃集層. 大森 光, 安藤寿男,村宮悠介,歌川史哲,隈隆成,吉田英一

(レター) 男鹿半島鵜ノ崎海岸の中新統西黒沢層・女川層中に見られる巨大鯨骨ドロマイトコンクリーション群の形成条件. 隈 隆成, 西本昌司, 村宮悠介, 吉田英一

(ノート) 名古屋港で採集された完新世炭酸塩コンクリーションの 14 C年代測定。南 雅代, 隈 隆成, 浅井沙紀, 髙橋 浩, 吉田英一

(総説) 玄能石および玄能石コンクリーションの産状と成因。村宮悠介, 吉田英一

(論説) 球状コンクリーションの展望:地球と火星での続成過程解読の観点から. Marjorie A. Chan

(総説) 地球と火星に見られる球状鉄コンクリーションの産状と成因. 長谷川 精, 吉田英一, 城野信一

(ノート) 微小領域蛍光X線マッピングの応用:鉄コンクリーション内部に見られる鉄バンドの形成プロセスと移動速度の評価.勝田長貴, 城野信一, 梅村綾子, 河原弘和, 吉田英一

(論説) 球状鉄コンクリーションの鉄殻成長過程の実験的解明. 岡村裕之, 城野信一

(レター) 画像解析と数値シミュレーションによる鉄コンクリーションのサイズ分布と空間分布の起源の解明. 城野信一, 田村美紗樹

(ノート) 炭酸カルシウムコンクリーションの水理・力学特性. 竹内真司, 後藤 慧, 中村祥子, 吉田英一

(ノート) コンクリーション生成メカニズムの工学的応用事例, 丸山一平, 吉田英一, 山本鋼志, 野口貴文

【内容】本文フルカラー A4版,約150ページ(従来の地質学雑誌とは用紙,印刷,製本方法は異なります.)

【価格】2,600円/冊+送料370円(会員価格)

【申込方法】会員氏名,送付先を明記して,学会事務局までお申し込みください.合わせて上記冊子代金をご送金ください.なお,複数冊購入希望の場合は,学会事務局までお問い合わせ下さい.

【申込受付期間】2023年5月31日(水) ※残部があれば、ジオストアでも販売いたします(定価:3,000円+送料)

【申込先】メール:main@geosociety.jp,FAX:03-5823-1156

【送金先】郵便振替口座 00140-8-28067 日本地質学会

ゆうちょ銀行 ○一九 (ゼロイチキュウ) 店 当座 0028067

一般社団法人日本地質学会 シヤ)ニホンチシツガツカイ

地質學雜誌

地質学雑誌は、2022年(128巻)からは完全電子化となりました。会員の皆様に、公開されている新しい論文をご紹介します。ぜひJ-STAGE上で本論文を閲覧してください。QRコードからも各原稿にアクセスして頂けます

https://www.jstage.jst.go.jp/browse/geosoc/-char/ja

新しい論文が公開されています

論説

御坂・巨摩山地の伊豆衝突帯に胚胎する黒鉱鉱 床の産状とその地質学的意義

浦辺徹郎, 伊藤谷生, 藤本光一郎

https://doi.org/10.5575/geosoc.2022.0028 御坂・巨摩山地に6つの黒鉱鉱床(宝, 笹子,万福,富里,茂倉,御座石)が胚 胎することが明らかになった。それらは 古伊豆弧における玄武岩を主とする海底 火山上に海底熱水鉱床として生成し,衝



突に伴って陸上に付加された。それらに共通の特徴として、(1) いずれも御坂・巨摩山地に分布する中期中新世の西八代層群の古関川層(約 15 Ma)およびその相当層に胚胎しており、古関川層の玄武岩溶岩はその下限が不明である。(2) 現在の伊豆弧の海底熱水鉱床は海底火山の火山中心にのみ見られることから、6 つの黒鉱鉱床の位置は当時の火山中心を示している可能性が高い。それらが衝突境界を示す糸魚川-静岡構造線、藤野木-愛川構造線、および三沢川断層から距離にして 1 km 以内に産することは、鉱床を生成した火山体群が鉱床を乗せたまま剥ぎ取られた形で境界部に重複衝突した可能性を示唆している。(3) 宝鉱床、茂倉鉱床の石膏の硫黄同位体比(δ^{34} S vs CDT(‰))はそれぞれ+21.9-+22.5‰、+20.1-+22.0‰と生成時の中新世海水硫酸基の値と等しい。

巡検案内書

御坂・巨摩山地の黒鉱鉱床:衝突した伊豆弧の 海底熱水鉱床

浦辺徹郎, 伊藤谷生, 藤本光一郎

https://doi.org/10.5575/geosoc.2022.0045 御坂・巨摩山地に分布する御坂層群, 西八代層群および櫛形山層群中の黒鉱鉱 床は宝-笹子,万福-富里,茂倉-三里,御 座石という4つの鉱床クラスターを形成 しており,いずれも15~13 Maに古伊豆



弧上で海底熱水鉱床として生成した.最も調査が進んでいる西八代層群の層序でいえば、下限不明の古関川層の玄武岩溶岩/火砕岩類の直上に胚胎し、常葉層勝坂泥岩部層に整合的に覆われている。4つの鉱床クラスターは、藤野木-愛川構造線、糸魚川-静岡構造線、および一部逆転した褶曲帯が集中して見られる三沢川断層から距離にして1km以内の場所に、それらとほぼ並行して線状に分布するという特徴を示している。

現在の伊豆・小笠原弧に見られる海底熱水鉱床は海底火山の火山中心に限定されるので、上記の黒鉱鉱床クラスターの産状は、古伊豆弧の海底火山体が海底熱水鉱床を載せたまま下位の島弧地殻から剥ぎ取られて、衝突境界ないし変形が集中した場所付近に折り重なるように集積したと考えるのが妥当である。本巡検では、黒鉱鉱床の産状を基に、南部フォッサマグナの伊豆衝突帯の衝突メカニズムについて新たな見方を提供し、参加者の議論に供したい。

論説

鳥取県東部白兎海岸の中新統鳥取層群の地質:河原火山岩部層のK-Ar年代と岩美層の未区分堆 積岩層の堆積環境

菅森義晃, 池内萌加, 佐野円香, 景山直樹, 小玉芳敬

https://doi.org/10.5575/geosoc.2022.0037

鳥取県東部の白兎海岸の気多岬および 淤岐ノ島に露出する鳥取層群の地質調査 および安山岩のK-Ar年代を測定した。 気多岬には鳥取層群八頭層河原火山岩部 層に帰属する両輝石安山岩が露出し、そ



の石基中の斜長石のK-Ar年代は18.3±0.6 Maであった. 絶対年代を比較すると,先行研究で指摘された河原火山岩部層が北但層群の養父亜層群八鹿層に対比される考えは支持される. 淤岐ノ島に露出する鳥取層群は岩美層に帰属するとみられ, 礫岩層を主体とし,河川環境下での火山活動の激化による堆積とその後の火山活動の鎮静化による斜面変形の一連の環境変化を記録した堆積物,広義のギルバート型ファンデルタの一部に比較できる地層を有する. 広義のギルバート型ファンデルタが示す古流向は現在の方位で南西方向であったため,東北東方向に陸地が存在したとする考えと調和的である. これらの知見は日本海形成初期における古地理の復元に有用なデータとなりうる.

論説

栃木県北部, 塩原カルデラ噴出物の編年とマグ マ変遷

西野佑紀, 長谷川 健, 伊藤久敏, 菊地瑛彦, 大井信三

栃木県、高原火山の塩原カルデラ形成噴火について編年とマグマ系を検討した。塩原カルデラ噴出物は下位からSo-KT(KT)、So-TN(TN) およびSo-OT(OT)の3つの火砕流堆積物に分

https://doi.org/10.5575/geosoc.2022.0046



けられる。KTの直下とKTとTNの間の火山灰土壌中には、 黒雲母の濃集で認識される外来テフラが認められる。火山 ガラスや磁鉄鉱の化学組成およびジルコンのU-Pb年代により、下位および上位の外来テフラはそれぞれ貝塩上宝テフラ(KMT:620 ka)と大町APmテフラ群(410~337 ka)に対比できる。軽石の岩石学的特徴から、いずれの火砕流 堆積物にもマグマ混合の証拠が認められ、それぞれ異なる 珪長質端成分マグマに由来することが分かる。特にKTと TNの間には約20万年以上の時間間隙があり、この間に珪長 質端成分マグマの起源である下部地殻の諸条件(起源物質 や溶融条件)が大きく変化したと考えられる。

論説

比抵抗イメージングによる郷村断層帯周辺の地 下構造および断層低比抵抗領域の時間変化の可 能性

三村 明, 山口 覚, 加藤茂弘, 村上英記, 金 幸隆, 福江一輝, 倉 光 伸, 小堺 航

https://doi.org/10.5575/geosoc.2022.0047 京都府丹後半島において27地点で AMT法電磁気探査を実施し、郷村断層、 仲禅寺断層、郷西方断層を横断する測線 に沿う比抵抗構造モデルを決定した。仲 禅寺断層付近より北東側は、この地域に



広く分布する宮津花崗岩体の、断層運動の影響をほとんど受けていない構造を示す。中央部の郷村断層直下には顕著な低比抵抗領域が深さ1 km付近まで認められ、これは断層活動に伴って形成されたと解釈した。一方、仲禅寺断層直下にはこのような特徴は認められない。両断層は同じ花崗岩体中にあり、また同じテクトニックな環境下にあること

地質學雜誌

から、比抵抗構造の違いは、活断層の最新活動からの経過 時間の違いに起因する可能性を示すと解釈した. 南西部の 郷西方断層では、断層運動に関連する比抵抗構造の特徴お よび地表変位が、共に極めて不明瞭であることから、この 断層は隣接する郷村断層の活動に伴う副次的な断層である 可能性が高いと推定される.

紀伊半島東部紀伊長島-大紀地域における四万十 帯玄武岩類の起源

中江 訓

https://doi.org/10.5575/geosoc.2022.0048 紀伊半島東部の紀伊長島-大紀地域に 分布する四万十帯上部白亜系付加複合体 の玄武岩類について、その起源・噴出場

を解明する目的で螢光X線分析による主 要成分元素と微量元素の組成を求めた.



6試料を分析した結果、5試料は比較的未分化な玄武岩質マ グマに由来したことが示唆され、判別図などから中央海嶺 に起源を持つ玄武岩であることが判明した. また1試料はよ り分化が進行した玄武岩質マグマに由来し、判別図では海 洋島玄武岩を起源とする可能性も指摘できるが、その確証 は得られなかった. 玄武岩類の産状・層序関係として、チ ャートあるいは赤色珪質岩を密接に伴う場合と砕屑岩類と 接して露出する場合があるが、少なくとも前者の玄武岩類 が噴出した環境として、陸源性砕屑物が流入し得ない遠洋 性大洋域の少なくとも炭酸塩補償深度より深い海底が想定 される。本地域の玄武岩類に関わるこれら二つの事象(地 球化学的特徴と層序学的関係) は互いに矛盾することなく. 同一の結論を導くものである.

双葉層群足沢層(上部白亜系コニアシアン階下 部)浅海成細粒砂岩の大型アンモナイト密集層 と巨大炭酸塩コンクリーション濃集層

大森 光, 安藤寿男, 村宮悠介, 歌川史哲, 隈 隆成, 吉田英https://doi.org/10.5575/geosoc.2022.0049

いわき市アンモナイトセンターの双葉 層群足沢層大久川部層(コニアシアン下 部) のアンモナイト (主に径40-60 cmの Mesopuzosia yubarensis) 密集層と直下 にある炭酸塩コンクリーション濃集層



の、堆積相・産状観察と地球化学分析から形成過程を考察 した. M. yubarensisは、沖合いの生息場から死後浮遊で沿 岸に達した軟体部の失われた殻が、ストーム波浪で住房部 が破壊され、分級・集積・運搬され、下部外浜沖合い側で 癒着HCS極細粒砂層のハンモックマウンドに沿って急速に 埋積した. 炭酸塩コンクリーションは. 多様なサイズ(径 15-194 cm) の長-扁球形で、密集しながらも比較的一様に 分布する. コンクリーションの形成は. ストーム波浪で運 搬された有機物と底質中のベントス遺骸の分解に伴って堆 積物の浅所で始まり、その後、埋没に伴い堆積物深所にお けるメタン生成帯での有機物分解が生じるまで継続した.

超新星爆発と地球

古本宗充

2023年129巻1号p.125-143

https://doi.org/10.5575/geosoc.2022.0051 太陽系形成以来、その近傍で超新星爆 発が多数回発生したはずである. こうし た超新星は電磁波, 宇宙線, 爆風等を通



して、様々な影響を地球に及ぼす、宇宙線による大気のイ オン化を通して、オゾンや窒素酸化物量の変化や気候変動 を起こす. また強い宇宙線は生物の絶滅や進化を促した可 能性がある. 宇宙線は大気中の原子と衝突することで、放 射性同位体を作り出す.加えて超新星爆発からは60Feなど の放射性元素も運ばれてくる. これらの同位体は堆積物や 氷床コアなど地質学的資料に残されている可能性がある.

男鹿半島鵜ノ崎海岸の中新統西黒沢層・女川層 中に見られる巨大鯨骨ドロマイトコンクリーシ ョン群の形成条件

隈 隆成, 西本昌司, 村宮悠介, 吉田英一 https://doi.org/10.5575/geosoc.2022.0050

Carbonate concretions occur in sedimentary rocks of widely varying geological ages throughout the world. Recently, more than 100 gigantic carbonate concretions with diameters



ranging from 1 to 9 m have been identified along the Unosaki coast of Oga Peninsula, Akita Prefecture, Japan. The formation process of such gigantic concretions, some of which along the Unosaki coast contain whale bones, remains uncertain. A mineral composition analysis reveals that the major mineral of the concretions is dolomite. Considering the location of dolomite precipitation, their composition implies that the concretions were formed in a reducing environment in which sulfate ions were removed. Stable carbon and oxygen isotopic analysis reveals that the CaCO3 of whale bone and concretions contains light δ^{13} C and heavy δ^{18} O, suggesting that whale organic matter contributed to the formation of the concretions. The gigantic carbonate concretions were presumably formed by the accumulation and burial of whale carcasses with high sedimentation rates, and subsequent reaction of carbon decomposed by benthic and microbial activity with seawater.

鹿児島県喜界島で発見された下部更新統知念層 とその意義

松田博貴, 林田将英, 千代延 俊, 山﨑 誠, 佐々木圭一

https://doi.org/10.5575/geosoc.2022.0055 琉球列島には, 泥質岩からなる上部中 新統~下部更新統島尻層群とサンゴ礁複 合体堆積物からなる下部~上部更新統琉 球層群が広く分布し、その境界部にはそ の中間的な岩相を示す下部更新統知念層



が局所的に分布する. これまで知念層は沖縄島中南部での み分布が知られていたが、鹿児島県喜界島において知念層 に対比できる地層が、新たに発見された. いずれの露頭で もコケムシ片に富む石灰質泥岩・砂岩、ないし砂質石灰岩 からなり, 堆積年代は1.71~1.39 Maを示し, 下位の島尻層 群早町層、上位の中部更新統琉球層群百之台層と明瞭な境 界で接している. 下位の早町層とは顕著な傾斜不整合の関 係にあり、島尻層群堆積後に傾動・削剥が起きたことが示 唆される. これに対し、上位の琉球層群との間には傾動運 動を示唆する構造差はなく、知念層堆積後、相対的海水準 低下に伴い陸化した後、陸源性砕屑物の供給が減少する堆 積環境へと変化したと考えられる.

地質學雜誌

論説

中新世の日本海拡大に伴う東北日本前弧域火山 活動:茨城県,塩子無斑晶状安山岩の地球化学 的特徴

山元孝広, 山﨑誠子

https://doi.org/10.5575/geosoc.2022.0054 茨城県城里町塩子に分布するアルミナ に乏しく, 鉄に富む無斑晶状安山岩の貫 入岩から, 新たに16.40±0.10 MaのK-Ar 年代値を得た. また微量成分組成とSr-Nd同位体比から, この火山岩が近傍の



元古沢玄武岩に近い組成の苦鉄質マグマの結晶分化で生成された残液マグマ起源であることを明らかにし、元古沢玄武岩については日本海拡大時の高温アセノスフェアの注入により溶融した島弧リソスフェア性マントルに由来する可能性を示した.

総説

暁新世ー始新世温暖化極大の海洋酸性化

山口龍彦, 久保田好美, 木元克典

https://doi.org/10.5575/geosoc.2022.0056

人為的な二酸化炭素排出に伴う、海水のpH低下(海洋酸性化)は炭酸塩骨格を持つ生物の成長や生存を阻害し、海洋生態系を著しく変えることが懸念されている、長期的な海水のpHは難しい、地



質時代には長期的な海洋酸性化が起きたことが報告されている。本論は暁新世-始新世温暖化極大(PETM)の海洋酸性化の最新の研究成果をまとめ,解決すべき課題を指摘した。PETMには浮遊性有孔虫殻のホウ素同位体比(δ^{11} B)の分析より海洋表層のpHが暁新世末よりも0.2-0.5低下した。pHの推定値には, δ^{11} Bの測定誤差や計算上の仮定による不確定性がある。二酸化炭素の増加量や海洋循環など海洋酸性化に関連する海洋環境は十分に解明されていない。今後,多角的なアプローチに基づく,より正確なpHおよび海洋環境の復元が望まれる。

|院生コーナー

学生・若手研究者のための交流会を終えて

下岡和也(愛媛大・博士課程2年)

桑野太輔(千葉大・博士課程3年)

松野哲士(東北大・博士課程1年)

南 沙樹(京都大・博士課程1年)

成田佳南(愛媛大・修士課程2年)

中山瀬那(島根大・修士課程1年)

地質学会若手有志会は、日本地質学会に所属する大学院生・ポスドク・会社員・研究員の有志からなる集団です(2023年3月時点8名).若手有志会では、2021年の発足以来、メーリングリストの運用や交流会・イベントを実施することで若手会員同士での交流の促進や学術活動の活発化を図っています。2022年9月には、早稲田大学での第129年学術大会に合わせて「学生・若手研究者のための交流会(現地・オンライン)」を開催しました。

本稿では、現地・オンラインそれぞれの交流会について、その模様と参加者の感想をまとめましたので、報告致します。

◆現地交流会

現地交流会は、現地大会2日目(2022年9月5日)の夜間小集 会の時間に口頭発表後の会場を利用し実施されました(写真1). 本交流会には、学部生5名、修士課程学生16名、博士課程学生 13名、ポスドク7名、大学教員6名、研究所から7名、企業から1 名、その他5名の計60名が参加してくださりました(写真2). 交流会の前半では、参加者全員に一人一言ずつの自己紹介をし てもらいました. 後半では、参加者の中から有志を募り、フィ ールドワークや実験室での様子など、自身の研究活動に関する 話題をスライド3枚程度で自由に紹介してもらいました. 共同 調査のお誘いや研究紹介、企画の宣伝のほか、露頭紹介やフィ ールドワークでの武勇伝など地質学会ならではの話題も多く取 り上げられ、活発なやりとりが行われました. 交流会終了後の 廊下や帰路では、知り合った参加者同士で研究談義や巡検への お誘いなどが行われており、現地開催の良さが活かされた交流 会になったと感じます. 以下には現地交流会に参加いただいた 3名の感想を掲載します. (下岡和也)

2021年はオンライン開催に、2022年は現地・オンライン開催に参加させていただきました。現地交流会では、2021年のオンライン交流会で話した学生と直接お会いできたこと。現地発表の内容に興味をもってくださった方がいたこと。なにより表情を感じながら多くの人と話ができたことが一番良かったです。特に研究室配属前の学部生が自分のフィールド調査に興味を持ってくれたことが印象的でした。自分の研究の話をする・他大学の方と交友関係を広げるという目的で参加した交流会ですが、現地で発表をして研究室配属前の未来の若手となる方に







(左) 写真1 現地交流会 司会席にて準備中の

様子

(中) 写真2 現地交流会 会場の様子(右) 写真3 オンライン交流会 集合写真

院生コーナー

「研究は楽しい」と直接伝えるのも比較的距離の近い私たちの 役目なのだなと今回の交流会で感じました. (成田佳南)

様々な専門の方が一度に集まるのは貴重な機会だなと思うと同時に、「地球惑星科学が好きで好きでたまらないんだろうなあ」という方のお話を聞けて思わずにやけてしまいました(悩むことは山のようにありますが、勿論私も大好きです!))学会発表では垣間見ることができない面白い一面を知ることができて、少し親近感が湧きました。そして交流会を通して新たな縦と横の繋がりができたことも嬉しかったです。同世代の方々の研究への熱意をダイレクトに感じられ、私もより研究に励もうと思えました。今後は懇親会も開催できるともっと若手が盛り上がりそうです。また参加できればと思います。(南沙樹)

私たちの学年は、学会に参加し始めることが多いM1からこれまでの期間、大半がオンラインの学会でした。そして、多くの同期は、現地開催の学会に参加することなく卒業し、実際にどのような学生が集っているのか、ほとんど見ることができませんでした。今回の若手の会では、学部1年生(←すごく驚きました)から修士・博士・ポスドクの皆様まで、幅広く個性的な若手の皆さまと交流することができ、とても良い刺激になりました。かつ、これを契機に数人の方と関係性を作れたことは、とても嬉しいことです。来年以降も開催を期待します。(松野哲士)

◆オンライン交流会

学生・若手のための交流会のうち、オンライン交流会は、2022年9月10日のポスターセッション後にzoomを使用して実施されました。本交流会には、学部生・大学院生12名、ポスドク3名、大学教員3名、研究所所属2名、企業所属2名の計19名が参加してくださりました(写真3)、交流会の前半では、桑野(千葉大)、神谷さん(同志社大)、板野さん(秋田大)の3名が、米国掘削船JOIDES Resolution号への乗船経験や博士課程からポスドクまでの研究生活などについての体験談に関する講演を行い、今後の研究活動や進路に関する貴重な生の声を参加者の皆さんにお届けしました。これらの講演は、普段の研究生活や学会などの中ではな

かなか聴くことができない研究キャリアや、その体験談を皆さんに届けることで、地質学を学ぶ若手の学生・研究者同士を盛り上げようと考え実施しました。講演後には、参加者の皆さんからの質問も多く挙がっており、非常に活発な会になりました。また、会の後半では、ブレイクアウトルームでの懇親会が開催され、参加者同士で知り合いを増やしたり、研究に関する情報交換、進路相談などを行ったりしました。オンライン交流会には、現地の学会に参加できなかった学生の方も参加してくださり、非常に有意義な会になりました。以下にはオンライン交流会に参加していただいた方の感想を掲載します。(桑野太輔)

オンラインの若手交流会では、はじめにポスドク・博士課程の方のお話を聞かせていただだきました。私は身近にポスドクの方がおらず、ポスドクとはどのような立場なのか、どのような生活を送っているのかを知ることができ、新鮮でした。また、お話をしてくださった方々は、研究に対して大変熱心であることが伝わり、刺激を受けました。私も自分の研究に対して熱く語れるように、研究に真摯に向き合い、精進していきたいと思いました。私は後半の交流会には少ししか参加できませんでしたが、若手での巡検の話などが話題に挙がっており、実現すると嬉しいなと思いました。(中山瀬那)

今後も若手会員を対象とした,交流会やイベントを開催してい きたいと考えています.多くの皆様の参加をお待ちしております.

(注)著者の所属と学年は2022年9月時点のものです。

常時投稿をお待ちしています. 編集は, 現在以下の4名で行っています. 原稿は1500~5000文字程度, 図・写真3点以内を目安に, e-mailでお送りください.

表紙紹介

第13回惑星地球フォトコンテスト入選作品

入選:4億年の記憶

写真:中川達郎(愛媛県)

撮影場所:愛媛県西予市三瓶町周木須崎海岸

撮影者より:2022年1月に再認定になった「四国西予ジオパーク」のジオサイトのひとつ,黒瀬川構造帯須崎海岸です. 赤道付近から移動してきたと考えられているそうで、火山灰が海底に降り積もって固まった凝灰岩層で約4億年前の古い地層とのことです。この岩体は、マンモス岩と呼ばれて親しまれています。数年前の夏、西側から縦じまの地層がクリアに見えるように干潮時の夕刻前に太陽を背にして撮影しました。

審査委員長講評:四国西予ジオパークは愛媛県にある東西に細長いジオパークで、その海岸部に位置するのが須崎海岸です。4億年前のシルル紀~デボン紀の地層は日本では分布が限られますが、海岸にこんなにくっきりと地層まで見える場所があるとは知りませんでした。最近はジオパークのHP等があるので、このような場所にアクセスしやすくなりました。(審査委員長 白尾元理)

地質的背景: 須崎海岸の縦縞の地層は、海の底で水平にたまった凝灰岩層が、その後の地殻変動でできたものです。4 億年ほど前に生きていたサンゴの化石や放散虫の化石が見つかっており、それらの研究から、当時オーストラリアや南 中国の陸塊が含まれていたゴンドワナ大陸の近くに起源をもつ地層だと推定されています。日本最古級の須崎海岸の地 層は、「黒瀬川帯」と呼ばれる地帯に分布する、日本列島誕生の鍵となる地層が保存されている代表的な場所のひとつ です。(髙橋 司:四国西予ジオパーク推進協議会)

学 会 記 事

2022年度第6回執行理事会議事録

日 程:2023年1月21日 (土) 13:00-19:00 【WEB会議】

出席(予定):岡田会長(14時頃入室予定)· 杉田・星・中澤・緒方・内尾・内野・尾 上・加藤・亀高・小宮・坂口・高嶋・辻 森・松田・矢部・山口・磯崎前会長(15 時頃入室予定)・下岡理事

監事:岩部監事 欠席:狩野,山本監事

事務局 澤木

- *定足数(過半数:10) に対し, 執行理事17 名の出席
- *前回22-5 (12/10) 議事録案確認

報告事項

- 1. 全体的報告
- ・文部科学省より、次期(令和6年度開始) 「地震火山観測研究計画」に対するアンケート調査依頼あり、各専門部会へ議論を依頼し、取りまとめて回答した。
- ・学術会議会員・連携会員の選考対象に関する情報提供依頼に対して、学術戦略ワーキンググループ (WG) で検討を行い、地質学会として5名の情報提供を行った。
- ・日本地球惑星科学連合臨時学協会長会議 (1/20). 中澤常務出席. 内閣府発出「日本 学術会議の在り方についての方針(令和4 年12月6日)」に対して, JpGU会長声明を 予定している(「日本学術会議法の性急な 改正について再考を求める」1/31声明).
- ・第14回地理学連携機構・地理関連学会連合・人文・経済地理関連学会協議会合同総会の開催通知があった(3/2 於東京都立大学). 出欠返信3/1締切. 出席可否について会長に確認中.
- ・日本学術会議の「未来の学術振興構想(大型研究の後継)」の策定に向けた「学術の中長期研究戦略」の公募への提案を完了した(22/12/16締切).「地球惑星研究資料のアーカイブ化とキュレーションシステムの構築」(代表:岡田誠、連絡責任者:小宮剛)
- 2. 運営財政部会(亀高・加藤)
- 1) 総務委員会
- <共催・後援依頼, 他団体の募集, 連絡等>
- ・令和5年度苗場山麓ジオパーク学術研究奨 励事業助成金募集(3/3)【→geo-flash,HP 掲載】

<会員>

1. 今月の入会者 (3名)

正会員(2名):小林伸一,澤 燦道正(院生割)会員(1名):千葉 響

2. 今月の退会者(3名)

正会員(3名):富田友幸, Valera Gabriel, BURHAN Nurul

3. 今月の逝去者(4名)

名誉会員 (1名): 端山好和 (逝去日: 2022年 2月26日)

正会員(3名): 松井和典(逝去日:2022年3月10日),阿部龍市(逝去日:2022年12月19日),小泉明裕(逝去日:2023年1月1日)4.2022年12月末会員数

賛助: 27, 名誉: 37, 正会員: 3236 [内訳 正会員: 3113, 院割: 116, 学部割: 7] 合計 3300 (昨年比-60)

<会計>

- ・学術著作権協会より、2022年度著作権使用 料等分配金(¥192,689)の入金があった。 < その他 >
- ・12/26総務委員会(対面)を開催した.現 状の情報共有,クラウド化進捗,理事会オンライン方式(規約化),オンラインストレージ設置などを検討した.理事会オンライン方式については,このメリットに鑑み,コロナ後も適宜WEB会議が実施できるように規約化したい.
- ・事務局契約職員白木玲子氏は、契約期間満了につき1/8付で退職した。今後はクラウド化等により、事務局業務の効率化をさらに進め、2人体制を基本とする。ただし繁忙期は、適宜アルバイト等を手当する。
- 3. 広報部会(内尾・松田)
- 1) 広報委員会(内尾) 特になし.

4. 学術研究部会(辻森·尾上·高嶋·山口)

- 1) 行事委員会(高嶋・山口)
- ・1/23行事委員会を開催予定 (zoom). 学術 大会トピックセッションの方針の確認と広 報などについて議論する.
- ・ショートコース(山口): 12/18第6回ショートコースを開催した. 73名出席. 参加者からのアンケートでは評価を受けている. 次回第7回(4月)は応力解析をテーマにする. 講師:大坪 誠会員(産総研), 佐藤活志会員(京大).
- 2) 専門部会連絡委員会(尾上) 特になし
- 3) 国際交流委員会(辻森)
- ・韓国地質学会とのMOU更新について(岡田会長): 大韓地質学会との学術交流協定 (MOU) は昨年10月で更新切れとなっている. 韓国側からの公式な連絡があった場合には改めて検討する.
- 4) 地質標準化委員会(内野) 特になし
- 5. 編集出版部会 (狩野・小宮)
- 1) 地質学雑誌編集委員会(小宮)
- (1)編集状況報告(2023年1月18日現在)
- ・2022年投稿論文:69 [内訳] 論説34 (和文30, 英文4), 総説9 (和文9), ノート5 (和文5), レター8 (和文6, 英2), 報告3 (和文2, 英文1), フォト1 (和文1), 巡検案内書9

査読中:19, 受理済み:3

- ・128巻: 公開済み30 (計528ページ), 入稿・ 校正中17
- ・特集号「球状コンクリーションの科学」 (世話人:吉田英一ほか)の冊子体作成について:まもなく構成論文全て公開予定。電子化後の移行期のため世話人に希望を確認し、冊子体を作成することとした。200部作成、会員価格:2,600円、非会員価格:3,000円、2023年3月末頃まで会員優先で注文販売(会員価格).その後、ジオストアで2023年度末(24年3月末)まで販売(非会員価格).残部は世話人が買い取ることで了承済み
- ・オンデマンド版冊子:129巻についても128 巻同様年間購読を受け付ける(3/20締切).
- ・SIMシステム投稿画面について、投稿時の 選択項目が最新の規則に沿っていない箇所 がある(例: Appendixの選択項目が無い). 確認の上、現状に合わせて適宜修正する.
- 2) アイランドアーク編集委員会 (狩野)

(1)編集状況報告

- ・新年度になってすでに新規投稿があり、投稿状況は順調.
- ・2023年IFは下がることが予想されるが、これは算出ルール改正によるもので、他誌も同じ、
- 3) 企画出版委員会(松田) 特になし
- 6. 社会貢献部会(坂口・矢部・内野)
- 1) 地学教育委員会(坂口)
- ・令和5年度大学入学共通テストの講評について、地学基礎36.21点、地学49.12点の平均点が公表された(中間集計)。今年は難易度が下がり平均点が上がって、受験者が選択しやすくなったと考えられるが、地学の受験者数は徐々に減っている。
- ・今年は、地理の試験に地学の出題が目立った。また、高校では地理総合が必修となったが、自然地理を教えられる教員が少ない現状がある。今後地質学会としても地理・生物系分野との連携が重要となる。
- 2) 地質技術者教育委員会(坂口)
- ・2021年度地質系若手人材動向調査報告をニュース誌12月号に掲載した.989名の卒業修了,618名 就職,299名 地 学 系 就職. JABEE校が地学系就職に貢献していることがわかる.
- ・第3回JABEEシンポジウムを2023年3月5日 (日) 13:30~18:00. Zoomによるオンライン方式で開催予定. 会員, 非会員問わず参加無料. 事前申込制 (1月27日から申込受付開始). 定員先着150名. 開催趣旨, 講演予定等をHPに掲載した.
- ・地質系若手のためのキャリアビジョン誌は、全国区40社+地方区51社を掲載した (昨年比+19). 現在印刷中. 1月中に発送 予定.
- 3) 生涯教育委員会(矢部)
- ・1/5, 1/6に委員会を開催し, 各担当の進捗 状況を共有した.

- ・ニュース誌連載記事の「博物館で地学を学 6) 各賞選考委員会(中澤) ぼう!」にジオパーク関連施設が参加しや すいようタイトルを変更し,「博物館・ジ オパークで地球を学ぼう!」とすることと した.
- 4) 地震火山地質こどもサマースクール (星)
- ・2022年浅間大会の実施報告および決算につ いて、35.894円の追加負担金支払要請があ り承認した、コロナ禍で大会が延期され、 下見が複数回必要となったための追加支
- ・2023年平塚大会については 例年通り20万 円の拠出金を出すことについて承認した。
- 5) 地質の日(矢部)
- ・街中ジオ散歩の下見を横浜市神奈川区~西 区で1/8に実施し、5/14(日)に同コース で実施する方針を確認した. 案内者は笠間 友博理事. 神奈川県立生命の星・地球博物 館の共催、横浜市神奈川区および西区の後 援を得るべく、手続きを進める予定.
- ・オンライン普及講演会のテーマ・内容等に ついて検討を進めている.
- ・地質の日事業推進委員会(外部委員会)の メール会議が開催された. 委員長交代(旧) 平田大二→ (新) 矢部 淳. 今年の事業方 針について協議したほか, 改訂作業中の平 凡社新版地学事典・改訂版に掲載する「地 質の日」の英語表記をGeology Day in Japanとすることなどが確認された.
- 7. その他執行理事会の下に設置される委員会 及び組織
- 1) 利益相反マネージメント委員会(中澤) 特になし
- 2) 若手育成事業検討WG (内野) (→審議事

特になし

- 3) 表彰制度検討WG (中澤) 特になし
- 8. 理事会の下に設置される委員会
- 1) ジオパーク支援委員会(矢部)
- ・1/28シンポジウムについて、プレスリリー スを行った. Zoom参加申込者211名 (1/20 締切). Youtubeライブ配信も行う.
- 2) 地学オリンピック支援委員会(坂口) 特になし
- 3) 支部長連絡会議(杉田) 特になし
- 4) 地質災害委員会(松田)
- ・関東大震災から100年と関連して関東支部 が中心となりイベントの検討を行ってい る. 今のところ巡検を中心に考えておりい くつかの案がでているが、多くの学協会で 取組みがあるのでもう少し時間をかけてア イデアを練ることとなった.
- ・防災学術連携体より「関東大震災100年企 画冊子」への寄稿依頼(5/22原稿締切)が あった. 検討中.
- 5) 名誉会員推薦委員会(星)
- ・2023年度名誉会員推薦依頼中(2/9締切)

- 選考作業中
- 7) ジェンダー・ダイバーシティ委員会(辻 森)

特になし

- 8) 連携事業委員会(中澤)
- 特になし
- 9) 法務委員会(中澤) 特になし
- 9 研究委員会
- 1) 南極地質研究委員会(委員長 大和田正 田日)

特になし

- 2) 法地質学研究委員会 (委員長 川村紀子; 杉田)
- 特になし
- 10 その他
- 1) 若手有志会企画の地質系業界オンライン 交流会(星)
- ・若手有志会が企画・運営する「地質系業界 オンライン交流会」を座談会形式で行う (2/17開催予定). 講演を地質系企業, 博物 館, 省庁系の5名の方々に依頼予定. 学会 から各企業等の人事担当に依頼書を送付す るとともに、学会ウェブサイトやSNS等で 広報を行う.
- ・この企画の認知度が高くないこと、学会の 業界説明会でも非会員の学生が参加できた ことから、非会員学生も参加可とする、非 会員学生には積極的に学会への入会を促

審議事項

- 1. 若手巡検および若手活動運営委員会設立に ついて (下岡理事)
- ・(若手巡検) 12月理事会で出された意見, 指摘を反映させ、企画をさらにブラッシュ アップした. 学術大会等の巡検に準じて. 旅行業者にバス手配等を依頼予定. 学会事 務局と経費の細部について相談・確認し、 最終的な参加費を算出する. 4月から参加 者募集開始予定.
- ・(若手活動運営委員会) 12月理事会審議を 受け, 若手活動運営委員会設立趣意書案, 委員会規則案が提示された (代表者:神谷 奈々ほか委員7名). 細部について加筆修正 の上, 次回理事会へ提案する.
- 2.「学生会員」への学術大会等巡検参加補助 について (内野)

巡検実施年の4月1日現在で満32歳未満の学生 会員を対象として, 竹内圭史会員からの寄付 金より、巡検参加費の半額を補助する. な お、支部等の他の巡検にも適用できるが、そ の場合, 募集前に執行理事会へ申請し, 許可 を得ることとする. 審議事項1の若手巡検も 補助対象となる. この内規については費用を 伴うものであり理事会に上程する.

3. フィールドワーク賞の賞金について(内 野)

- 若手の研究者への奨励を目的とし, 一件当た り10万円とする.
- 4. 地質学雑誌投稿編集出版規則の改定(小
- 12月理事会で指摘のあった箇所, 文言等を微 小修正した.
- ・著者に逝去者が含まれる場合, 論文に死去 した旨と死去年を記載する.
- ・オーサーシップを明記する.「例えば、研 究費の獲得.・・・・記載することはでき ない
- エディターリジェクトの明記。
- 5. 京都大会の大会, ポスター, 懇親会, ジュ ニアセッションの開催方式について(高嶋)
- ・完全対面開催を目指して準備を進める(口 頭、ポスターとも対面開催, e-posterは実 施しない. 口頭発表者のオンライン出演の 対応も行わない)
- ・ジュニアセッションも対面開催とする. 遠 隔地の学校はオンラインの方が参加しやす い面もあるが、生徒・児童が研究者と対面 で議論する機会を重視してもらいたい. 従 来通り会場へ来られない場合は、ポスター のみ送付の参加を認め、審査の対象とす
- 6. 選挙規則の改正について (岡田会長, 杉田 副会長)
- ・(女性・若手枠について) ジェンダー・ダ イバーシティの観点から、代議員、理事の 若手および女性の構成比を上昇させること を目的に、階層別の最低充足数の改正し、 それに合わせた選挙規則の改正素案が提示 された. 現在20%弱の構成比を将来的には 30%以上にすることが望ましいが、現実に 即して、まずは25%を目標に設定し段階的 に構成比を上昇させていく. 具体的には, 現在の階層別最低充足数をそれぞれ半減さ せて、女性・若手が入り易い形にする. 引 き続き、理事会提案に向けて改正案の詳細 を詰める. なお, 「若手」の定義は、学会 の各賞の定義(32歳未満)と整合させるこ とが望ましい. 「若手」の代議員・理事に 積極的に学会運営に携わっていただきたい が、一方で32歳頃は研究繁忙の重要時期で もあり、学会運営の業務負担が大きくなる ことは避けた方がよいとの意見もあった. これについては、ジェンダー・ダイバーシ ティ委員会にも相談する. また, 最低充足 数は会員構成比も考慮して設定することが 望ましいので、今後は、5-6年毎に構成比 に応じて. 充足数を見直すことも検討した
- ・(その他) 現在の定数は多すぎるのではな いか、各地方支部区の定数は適切か、全国 区/地方区の区別は必要か、などの重要な 意見が出された. 各支部に対し, 立候補者 擁立の現状や支部選出の代議員/理事のあ り方について意見聴取し、議論を進めて行 くこととした.
- 7. その他
- ・学会HP「アイデア募集」フォーム作成に

ついて (山口)

学会活動改善のために、「アイデア募集」フォームを作って、会員の建設的な意見を吸い上げる. ただし寄せられた意見に対する返信は必須としない. 投稿内容は、執行理事会にて共有していく. HPにて「アイデア募集」フォームを試作することした.

監事コメント (岩部監事)

選挙規則の改正に関わる地方支部区の取扱いについて:支部の活動は、地方支部区選出の代議員が中心となって活動しているところもあり、活発な支部活動は、それら代議員によるところが大きい。それらの活動が停滞することのないよう、各支部の状況やあり方を充分考慮して、規則改正を進めて頂きたい。

以上

2023年2月11日 一般社団法人日本地質学会 会長(代表理事)岡田 誠 署名人 執行理事 中澤 努

CALENDAR

2023 4~

地球科学分野に関する研究会,学会,国際会議,などの開催日,会合名,開催学会,開催場所をご案内致します.会員の皆様の情報をお待ちしています.

★印は学会主催, (共) 共催, (後) 後援, (協) 協賛.

2023年

4月 April

技術士を目指そう 修習ガイダンス2023

主催:技術士会修習技術者支援委員会 4月8日(土)13:00~17:00 堪所:

1) オンライン (Zoomを使用)

2) 機械振興会館(東京都港区芝公園3-5-8) https://www.engineer.or.jp/c_topics/009/ 009253.html

日本学術会議公開シンポジウム・第 15回防災学術連携シンポジウム

「気候変動がもたらす災害対策・防災研究の 新展開」

4月11日 (火) 13:00~17:00 ZOOM ウェビナー 定員:1000名 https://janet-dr.com/060_event/20230411.

日本堆積学会 2023 年新潟大会

4月22日 (土) ~ 24日 (月)

会場:新潟大学

https://sites.google.com/view/ssjconference 2023niigata

6月 June 地質学史懇話会

6月10日 (土) 13:30~17:00

場所:早稲田奉仕園(オンラインとハイブリ

ッド)

小澤健史「ドイツ・ハーツ鉱山とドイツ系日 本人ペーター・ハーツィング |

今村遼平「中国地図測量史」続

問い合わせ:矢島道子 pxi02070[at]nifty.com

7月 July

第4回国際黒曜石会議

International Obsidian Conference(IOC) Engaru 2023

7月3日 (月) -6日 (木)

開催地:北海道紋別郡遠軽町

 $\label{lem:https://sites.google.com/view/} https://sites.google.com/view/\\ iocengaru2023/home$

(後) 第60回アイソトープ・放射線研 究発表会

7月5日(水)~7日(金) 会場:東京都内会場(予定)

https://confit.atlas.jp/guide/event/ jrias2023/top

8月 August

(共) 岩石-水相互作用 (WRI-17) または応用同位体地球化学 (AIG-14) 合同国際会議

8月18日(金)~22日(火) 会場:仙台国際センター 参加料金早期割引締切:4月30日 https://www.wri17.com/

WCFS2023 Japan: Floating Solutions for the Next SDGs

8月28日-29日: 論文発表等 8月30日: テクニカルツアー

場所:日本大学理工学部(東京都千代田区神

田駿河台)(予定)

https://wcfs2023.nextsdgs.org/

9月 September

★日本地質学会第130年学術大会 (2023京都)

9月17日(日)-19日(火) 会場:京都大学

2023年防災推進国民大会(ぼうさいこくたい)

9月17日 (日) -18日 (月・祝)

場所:横浜国立大学(横浜市保土ヶ谷区常盤台) https://bosai-kokutai.jp/2023/

10月 October

(協) Techno-Ocean 2023

10月5日 (木) ~7日 (土) 会場:神戸国際展示場2号館 ほか https://to2023.techno-ocean.com/

国際ゴンドワナ研究連合 (IAGR) 2023年総会及び第20回ゴンドワナからアジア国際シンポジウム

10月8日~9日(シンポジウム)

10月10日~11日(糸魚川ユネスコ世界ジオパーク野外巡検)

会場:新潟大学中央図書館ライブラリーホー

ル (新潟市西区五十嵐2の町8050)

問い合わせ: M. Satish-Kumar, iagr2023@ geo.sc.niigata-u.ac.jp

■ 日本地質学会News 26 (3)



名誉会員 端山好和先生を偲ぶ

日本地質学会名誉会員,東京農業大学名誉教授の端山好和先生は2022年2月26日にご逝去されました。94歳でした。1927年9月9日神奈川県に生まれ、1953年東京大学理学部地質学科で「足尾山地の接触変成岩」の研究で卒論を書かれ、1958年3月まで長野県駒ヶ根地方領家変成岩類の調査研究で地質学科研究生として在籍されました。

1958年4月東京農業大学農学部農業工学科小出博教授の助手として赴任, 1998年3月まで40年間東京農業大学に勤務されました。この間, 1961年3月17日東京大学より「長野県駒ヶ根地方領家変成帯の広域変成作用」で理学博士の学位を取得. 1971年に助教授, 1975年に教職課程に移籍, 1976年に教授, 1988年教養課程に移籍, さらに1994年教養課程の廃止により農芸化学科に移籍して農学部の4職場を経験されました.

私は1977年東京農業大学教職課程の非常勤講師として端山先生担当の教職課程科目の「地学」・「地学実験」の一部をまかされ、端山先生との付き合いが始まりました。東京教育大学の筑波移転の時期で、私もいた牛来正夫研究室も解散になり、「今まで茗荷谷で開催していた岩石談話会を農大で継続できないか」との牛来さんから端山先生への要請で1978年4月から「地学談話会」を端山研究室で継続することになり、オーバードクター生活を送っていた数人と牛来さんが定期的に情報交換できる場所を提供して頂きました。この会はその後、定年退職した地質学者等の情報交換等の場にかわりましたが21世紀まで続きました。

ここでは1998年3月の端山先生の東京農業大学での最終講義 「私の地質学研究のあゆみ」の資料等を基に端山先生の業績を 振り返ります. 最終講義の初めで「私が大学へ入学いたしまし たのが1950年で、卒業いたしましたのが1953年ですから、ちょ うど朝鮮戦争の期間に大学生活を送ったことになります. この 期間には松川事件、三鷹事件、下山事件などの奇怪な事件が連 発いたしました. また, 第二次世界大戦における日本の敗戦を 私が経験したのが満18歳の誕生日を一ケ月足らずの先に控えた ときでありました. 日本の敗戦はそれまでの価値観を180度ひ っくり返してしまった出来事ですし、朝鮮戦争やその間に起こ った大事件は日本の戦後を再び大きく方向転換させた出来事で ありましたので、この間に私が送った学生生活は私のその後の 人生に計り知れない影響を残したと思っております.」と話さ れました. 教養課程に移籍後,「自然科学史」の講義を担当さ れ、この思いは晩年の自然科学史関係の著書にも色濃く反映さ れています.

端山先生は東京農業大学では「地学」・「地学実験」・「自然科学史」・「エネルギー資源論」・「環境地球化学論」等幅広い分野

を担当されました. 非常勤講師として1962年法政大学(教養部、~1971年), 1968年群馬大学(教育学部、~1974年, 1977年~1989年), 1971年信州大学(理学部, ~1972年), 1974年東京教育大学(理学部, ~1975年), 1978年京都大学(理学部, ~1979年) で務められ、多くの学生を教育されました. また, 1975年国際協力事業団の依頼によりメキシコ国有財産省鉱物資源審議会へ出張(~1976年) されています.

学会・社会活動等は1960年4月 日本地質学会研究奨励賞受賞, 1967年 日本岩石鉱物鉱床学会評議員 (~1970, 1982年~1984年), 1968年 学術審議会専門委員 (学術用語委員会~1984年, 科学研究費配分委員会1982年~1983年) などがありますが, 特に日本地質学会においては1977年から1990年まで評議員で庶務委員長, 編集委員長, 執行委員会委員長, 評議員会議長などを務められ, 1990年副会長, 1992年会長と多大な貢献をなされました.

1950年代は博士論文の領家帯の変成作用と平行して、黒瀬川 構造帯の三滝火成岩類に伴う片麻状ざくろ石角閃岩の成因的な 研究を山下昇さん等とされ、日本列島に高圧のもとでできた変 成岩の存在を初めて指摘されました. 今日では九州の八代から 紀伊半島まで点々と分布していることが知られ、しかも4億年 岩石として日本列島の歴史を考える上で重要な岩石となってい ます。1960年代からは共同研究が主となり、まずは山下昇さん 等と群馬県の下仁田地域の三階建てのOverthrust を明らかに し, さらにそのOverthrustのHeimatを明らかにされました. また, 谷川岳を中心とする地域に今は失われ, あるいは後の地 殻変動で姿を変えてしまった変成帯がかってあり、その変成帯 は, 九州北部から中国地方へ延長し, さらに飛騨山地を取り巻 いて点在する変成岩と共通するものであることを明らかにされ ました. それ以前には、外帯要素はFossa Magnaを越えて関東 へ連続していることがわかっていたのですが、内帯要素もまた 連続することが明らかになったのです。1970年代から1980年代 の前半までの中部地方の領家帯の共同研究は1974年にまとめら れ、「中部地方領家帯地質図(山田直利・片田正人・端山好和・ 山田哲雄・仲井豊、沓掛俊夫・諏訪兼位・宮川邦彦共著) | が 地質調査所から発行されました。1977年にはIGCP「環太平洋 深成作用研究集会」が日本で開かれ、領家帯巡検の案内者とし て活躍されました。1980年代には関東山地東縁から天龍峡型片 麻状花崗岩および鹿塩マイロナイトの発見や関東山地北縁から の牛伏山衝上断層の発見などにより、 領家帯がフォッサマグナ を越えて関東に伸びていることを明らかにされました。1990年 の日本地質学会の総会で端山先生は,「古領家古陸の復元」と 題して副会長講演をされました。また、1991年から大学のプロ ジェクト研究で、中国福建省の台湾海峡に面した地域の白亜紀 片麻状花崗岩の調査・研究を行い、この変成帯が4億年ぐらい 前の変成帯のうえに1億数千万年前の変成作用が重なったもの であることがわかり、領家帯との関係を考察されました.

主な著書として「日本の地質学(諏訪兼位・原郁夫と第2部 共著)1968,日本地質学会」、「.地学事典(編集代表および一部 執筆)、1970,平几社」、「地球の起源と歴史(井尻正二と共著) 1970,法政大学出版会」、「新地学教育講座4「岩石」(金井克 明・兼平慶一郎・村井武文と共編)、1976,東海大出版会」、 「日本の地質3「関東地方」(大森昌衛・堀口万吉と代表編集委 員)1986,共立出版」、「日本の地質学100年(第5章を執筆) 1993,日本地質学会」、「自然科学史入門(1998)東海大学出版 部」、「自然科学の歴史(2022)講談社」などがあります。

農大退職後は現代史の学習と研究に没頭されました。2001年にはアウシュヴィツの博物館を訪れ、現代の悲劇を目の前にして平和の尊さを実感されました。その後、お住まいの町田市での「革新懇話会」、「九条を守る会」などの活動に積極的に関与され、ご自身の学習成果を含めて、戦争と平和に関する沢山の著作、講演をされています。

本稿は山田直利氏の協力を得て記しました. 御礼申し上げます.

なお、写真は福建省の調査時に猪俣が撮影したものです. ここに謹んでご冥福をお祈りいたします.

(猪俣道也)

\mathbb{Z} 쌔 6 **41**

入会ご希望の方は下記の入会申込書を一般社団法人日本地質学会事務局へお送りください。 入会には正会員1名の紹介が必要です.近くに紹介者となるべき会員がいない場合はその旨お申し出ください、また,初年度の会費は 申込書郵送時から時間の間隔をおかずに下記送金先へ速やかにご送金ください、会員としての正式登録は、入会承認後,初年度会費 の入金を確認した上で行い、News誌の送付(4月号から)を開始いたします。

申込書郵送先: 101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-15 井桁ビル6F 一般社団法人日本地質学会

学会費送金先: 郵便振替口座 00140-8-28067 一般社団法人日本地質学会

ゆうちょ銀行 ○一九(ゼロイチキュウ)店/当座 0028067 /一般社団法人日本地質学会 シヤ)ニホンチシッカブカイ

会費年額: 正会員(一般会員・シニア会員)12,000円 ※1

% % 正会員(学生会員)5,000円/年、2年パック会費額:8000円、3年パック会費額:9000円)

ジュニア会員 0円(年会費不要) ※3

※1:シニア会員は、入会年度の4月1日時点で65歳以上のかたを対象とします(4/2以降に66歳になる方は次年度からシニア会員となります). ※2:学生会員は,次の2点を守って手続きして下さい、①学生証の写しを提出すること。②ペック制会費を希望の場合は一括納入すること。 ※3:ジュニア会員は、正会員の権利は有しません、学術大会での発表はジュニアセッションに限定します。

□ 学生) □ シニア (0 一般 □ 正 会 員 (□□ ジュニア会員 *会員種別

"*"学会記入欄:Official use only

学生証の写しをここへ貼付 『学生会員』入会希望者

Ŏ
Geo
the
for
form
Application
八書
曲
41
大
41
1 h
阿
赶
<u>L.</u>
삣
般社団法人
ΤÏ

*会員番号

gical Society of Japan 大枠内のみにご記入ください

氏名(ふりがな)Name in Japanese	ローマ李表記 family name	first name	会員情報について :在会者に限定し、Web版の会員管理システムにて会員情報の検索・閲覧をすることができます・氏名・西属先は掲載を <u>須項目です、</u> 下記の項目について 掲載を拒否する項目には ロ ドチェックを付けてください(チェックが無い項目は掲載承諾いただいたも のとします).
年Year月Mo目Day 生born on	Sex:□男 Male □女 Female Co	Country:	最終学歴 所属先学科名・部課名(掲載不可の場合は[OO大学OO学部] ㈱AAAA社]:
学歴 Academic career:			し 所属先任所 「 U 所属光電話・FAX番号 「 U 目宅住所 「 U 目毛電話・FAX番号 「 D e-mall Address
—————————————————————————————————————	年卒業 Year completed		
大学 University 学部 F	学部 Faculty年年	月 卒業(見込み)Year completed	紹介看名(正会員)
修士 Master: 大学Univ. 有	研究科Fac. 年 月 修了(見込み	見込み)Year completed	Recommended by (name of member)
博士 Master: 大学Univ. 有	研究科Fac.	了 (見込み)Year completed ※学生証の写し&忘れずに添えて下さい.	(学生のかた) 希望する会費額を選択して下さい、パック制会費選択者は,該当するパック制会費額を一括納入して下さい.
自宅住所 Home address: (郵便番号 Zip code			□ 5,000円(初年度のみ) / □ 2年パック:8,000円(初年度・次年度) / □ 3年パック:9,000円(初年度・次年度・次本年度)
			□ 学生会員として入会希望です。 学生証の写し を入会申込書に添えて提出します。
電話 Phone:	ファックス Fax:		専門部会の選択(任意)
所属機関名称·所属機関住所 Affiliation with address : (郵便番号 Zip code		—) ※郵便物がきちんと届けられるよう,ご記入ください.	- 現在, 下記の14の専門部会があり活動しています. 専門部会に参加ご希望の方は登録をお願いします. 所属希望の部会を3っまで選択することができます. (核当する項目にO印を付けて下さい)
			 地域地質 2. 層序 3. 堆積地質 4. 海洋地質 5. 構造地質 6. 岩石 7. 火山 8. 応用地質 9. 環境地質 10. 情報地質 11. 古生物 12. 第四紀地質 13. 環境変動史 14. 鉱物資源
電話 Phone:	ファックス Fax:		興味専門分野の選択(任意) あなたの興味専門分野を教えてください、3つまで選択することができます. (該当する項目にO印を付けて下さい)
e-mail Address:	©		1. 層位 2. 堆積・堆積岩 3. 古生物 4. 構造地質 5. 火山・火山岩 6. 深成岩 7. 変成岩
※e-mail Addressに地質学会からのメレマガ配信用、その他連絡用に登録します、携帯電話各社のe-mail Addressを記入の場合は登録いた ※所属先(代表)の問い合わせ専用 e-mail Address は記入しないでください。	ンます.携帯電話各社のe-mail Addressを記入の場合は登ごさい.	登録いたしません. ご注意ください.	9. 紙床 10. 紙物 11. 燃料地質 12. 地質 17. 土質工学 18. 水文地質 19. 探查地質 24. 地球物理 25. 地球化学 26. 地質4
連絡先 Correspondence: 口 自宅 Home	口 所属機関 Office		30. その他 40. 地球惑星
	-		(注)ご提供いただいた個人情報は、日本地質学会ブライバシーボリシーに基づき適切に取り扱います
*受付(年月月日)	*承認(年月	Н)	*入金(年 月 日) *送本(巻 号) 振替·現金·銀行·他

預金口座振替依頼書自動払込利用申込書(収加)

私は、SMBCファイナンスサービス株式会社から請求された金額を私名義の下記預金口座から 預金口座振替によって支払うこととしたいので、預金口座振替規定を確約のうえ依頼します。

収納代行会社 SMBCファイナンスサービス株式会社 振替日 (払込日) 6 日・23日 (金融機関体業日の場	合は翌営業日)
(フリガナ) 申込人名 申込人名 おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお	
ゆうちょ銀行以外の銀行またはゆうちょ銀行のどちらか一方に記入して下さい。	お届け印(捨印) ゆうちょ銀行を除く
法人の場合は、社名、代表者 役名、氏名を省略せすご記入ください。	金融機関へのごさ
 ウラちょ銀行お届けの社名、代表者 役名、氏名を省略せずご記入ください。 種目コード 契約種別コード 記号(6桁目がある場合は※欄にご記入下さい) 番号(右詰めでご記入ください。) 	のお届け印ですか
1 6 6 3 0 1 0 * 払込先口座番号 0 0 1 1 0 - 5 - 5 8 8 3 0 払 込 先加入者名 SMBCファイナンスサービス株式会社 〈収納企業使用欄〉	±)
収納企業名 一般社団法人 日本地質学会 料金等の 会 費	等
契約者番号 委託者コード 顧客コード 18476000000000000000000000000000000000000	
一預金口座振替規定 ── ※ ゆうちよ銀行払いは除く。 1.銀行 (金庫・組合) に請求書が送付されたときは、私に通知することなく、請求書配載金額を預金口座から引え支払ってください。この場合、預金規定または当座勘定規定にかかわらず、預金通帳、同払戻請求書の提出または小切手の提出はしません。 2.振替日において請求書記載金額が預金口座から払戻すことのできる金額(当座貸越を利用できる範囲内の金額を含む。)をこえるときは、私に通知することなく、請求書を返却してもさしつかえありません。 3.この契約を解約するときは、私から銀行(金庫・組合)に書面により届出ます。尚、この届出がないまま長期間にわたから請求がない等相当の事由があるときは、特に申出をしない限り、銀行(金庫・組合)はこの契約が終了したものとして取扱ってさしつかえありません。 4.この再金口座振替についてかりに紛議が生じても、銀行(金庫・組合)の責めによる場合を除き、銀行(金庫・組合)には迷惑をかけません。 ゆうちょ銀行をご指定の場合は自動払込み規定が適用されます。 (不備返却事由) 1.預金(貯金)取引なし 3.印鑑相違 2.記載事項等相違 店名、預金種目、口座番号、通帳記号、通帳番号、口座名義 4.その他(日参
(全融機関へのお願い) この預金口座振替依頼書・自動払込利用申込書に不備がありましたら、不備返却事由欄の 該当項目に○印をつけて速やかに右記不備返却先へご返送ください。 ②書類の流れ お客様→収納企業→SMBCファイナンスサービス→金融機関 不備返却先 SMBCファイナンスサービス(株) 決済ビジネス業務センター 口座振替依頼書課 〒105-8625 東京都港区新橋1-8-4 SMBC新橋ビル	

裏面のりしる③

一般社団法人日本地質学会倫理綱領

2003 年 9 月 19 日 日本地質学会総会制定 2009 年 12 月 5 日 一般社団法人日本地質学会制定*

日本地質学会の会員は、科学的真理を明らかにする事を目的として、誠実かつ真摯に地質学および関連科学の研究・教育および調査を行う。その成果を広く社会に公表することにより地質学および関連科学の進歩普及を図り、もって社会の発展と人類の福祉に貢献する。会員は、基本的人権を守り、良識かつ品位のある行動をとる。

- 1. 科学者としての倫理:会員は,専門知識の向上および地質学と関連科学の発展を目指して自己研磨を図る。研究と調査においては,法を尊守し,社会的良識に従って行動する。科学的事実に対しては常に謙虚,誠実でなくてはならない。研究成果と技術上の知見を広く社会に公表し,公表にあたっては先人と他者の業績を尊重する。
- 2. 知的交流の確保:会員は、国際交流や他分野との交流を進めることを通して学術の向上を図るとともに、研究成果と技術上の知見が科学的に広く吟味・検証されるよう努める.
- 3. 人類と社会への責務:会員は、その専門知識と技術を適切に活用し、研究と調査の成果を広く社会に提供することを通して社会の発展と人類の福祉に貢献する.

日本地質学会

- 4. 地球環境への責務:会員は、地球システムの諸現象についての専門家として、地質災害の予知と防止、地球環境の将来予測、資源の適正な活用に関する情報を提供するとともに、専門知識を活かして環境の保全と改善に努める。自らの研究と調査の実施にあたっては環境への影響を最小限にするよう配慮する。
- 5. 次世代への責務:会員は、地質学と関連科学における学術と技術の継承と発展、次世代を支える人材の育成を図る、研究や調査の成果物、重要な露頭や標本などの科学的遺産の保全に努める。

*2009 年 12 月 5 日法人理事会において、一般社団法人日本地質学会倫理綱領として全文引継を決定。

